

こども風土記

柳田国男

青空文庫

小序

子どもとそのお母さんたちとに、ともどもに読めるものをつい
う、朝日の企てに動かされたのであったが、私にはもうそういう
註文ちゅうもんに合うような文章を書くことができなくなっているらし
い。「こども風土記」が新聞に連載せられている間、面白く読ん
でいるよと言って励ましてくれた人は多かったが、それはたい
いは年をとった仲間だけであった。近所のまたは親しい少年少女
の中には、気をつけていたけれども、読んでいる者ははなはだ少
なかった。

うれしかったのは友人の一人が、うちではいつのまにか朝日が切り抜いてある。子どもが読んでから帳面に貼るそうだと、告げてくれたことである。九州の或る町からは、お清書せいしょのような字を葉書に書いて、鹿しかの角つのの遊びを知らせて来た少女がある。母が柳田さんにお知らせするとよいと言いましたからとあるのを見て、是これだけは少なくとも予定の読者であつたことがわかつた。小学生の通信は、この以外には二つ三つしか受取っていないが、それでも東京・大阪の都会へ出て働いている人で、ほんの四、五年前の子どもかと思われる人たちから、あどけない感激の手紙は幾つか来ている。始めて親に離れ故郷に別れて、人ひと中なかの生活をする者の胸のうちには、或いはもう一度「子ども」の感じが蘇よみがえつて来る

のではあるまいか。もしそうだとすると、強^しいて現在の子どもと母ばかりを追うてあるくにも及ぶまいかと思う。一つの新しい経験は、横浜近くに住む或る一人の女性から、こういう意味のことを私へ言つて来られた。自分は亡夫が外国にいた留守^{るす}の間、二児を連れて伊予^{いよ}の松山^{まつやま}に住んでいたが、鹿々何本の遊びは毎日のように子どもが窓の外へ来て遊んだのでよく知っている。ただそれがどうい^{しよ}う所作^{しよさ}を伴うかは出ても見なかったので言うことができない。当時最も熱心にこの遊戯に参与した二人の子どもに問えばすぐに判^{わか}るのだが、一人は中支にあり、一人は九州の或る職場に働いているので、今は尋ねてみる方法もないという。すなわち茲^{ここ}にもまた二十年前の子どもとお母様とが、再びその感慨を新た

にしているのである。母といった日の悦楽は、老いたる私にさえも蘇ってくる。つまりはこの文章は人のために書いたのではなかった。

「こども風土記」が本の形になって世に遺^{のこ}ると聴^きいて、改めてまた私は考えて見た。現在の少年少女が老い尽し、彼らの孫曾孫^{ひまご}が嬉々^{きき}として膝^{ひざ}の前に遊び戯^{たわむ}るを見る時代には、この一卷の文章は果してどうなっているであろうか。人間に永遠の児童があり、不^ふ朽^{きゆう}の母性があることを認めつつも、それを未出の同胞国民とともに、談^{かた}りかわすべき用意は整っていると言えるであろうか。僅^{わず}か百年を隔てた祖先の文章は、もう註^{ちゆう}釈^{しやく}がなくては我々には読めない。今日の文章はさらに一段と時代の制約を受けている。

是がいわゆる現代語訳のお世話になり、味も匂いにおもすり切れてしまつてから、ただ義理だけに敬われるようなことのないように、時の古今に互わたつた国語の統一ということが、もう考えられてもよかつたのではないか。無始むしの昔から無限の末の世まで、続いて絶えない母と子との問題であるが故に、ことにその感を深くするものである。読者をただ眼前の人のみに求めた私たちの態度にも懺ざ悔んげすべきものが至つて多い。もう間に合わぬかも知れぬけれども、是を機縁として改めて文章の書きかたを学びたいと思う。

昭和十六年十二月十四日

伊豆古奈の温泉において

著者しるす

鹿・鹿・角・何本

一昨年の九月、米国ミズリー大学のブリウスタアという未知の人から面白い手紙の問合せを受けた。もしか日本にはこういう子供の遊戯はありませんかという尋ねである。一人の子が目隠しめかくをして立っていると、その後にいる別の子が、ある簡単な文句で拍ひ子ようしをとって背なかを叩たたきその手で何本かの指を出して、その数を目隠しの子に当てさせる。英語では問いの文句が、

鹿^{しか}が

持つか」

How many horns has the buck? 「いかに 多くの 角を 牡^お

ドイツのも全くこれと同じだが、国語のちがいで一言^{ひとこと}葉^は少^{すく}な
く、イタリアでは四言葉、スウェーデンやトルコなどは二言^{ふたこと}葉^は
で、やはり意味は鹿の角の数を訊^きくことになっている。目隠しを
する代りに壁にもたれ、また四^よつん這^はいになって、その背に跨^{またが}つ
て、指を立てて問う例もある。もう長いあいだかかって調べてい
ると見えて、これ以外にスコットランド、アイルランド、米合衆
国、フランス、ベルギー、オランダ、ギリシア、セルビア、ヘル
ツェゴビナ、エストニア、スペイン、ポルトガルにも同じ遊びの

あることを確かめたといっている。日本にももしかそれがあつたら、面白いと思うがどうかという質問である。

古い文献では、ペトロニウスの諷刺詩ふうししの一つにも出ているという話である。あつたらなるほど面白いが、どうもまだ聞いたことがないようだ、と皆がいうので、一応そういう返事をして置いて、なお念のため『民間伝承』の会報にこの手紙を訳して載せておくと、ほどなく二カ所から、あるという報知がやって来た。ありませんなどという答えはめったにできるものでないということを、しみじみと我々は経験したのである。

滋賀県の今津いまづ近くの村では、少なくとも二十年ほど前まで、この遊びをしたということを、長浜女学校の三田村君がまず知らせ

てくれた。じゃんけんに負けた一人の子は、窓のへりなどにつか
ま^まつて身を曲げていると、勝った方の子がそれに馬乗^{うまの}りになつて、
指を出して、その数を下の子にいい当てさせ、それが当るまでは
この問答をくりかえし、あたれば今度は上の子が答える番にまわ
るのだそうである。馬乗りになるだけで、もう背なかは打たなか
つたらしいが、やはりその文句は、

鹿^{しか}・鹿^{しか}・角^{つの}・何^{なん}本^{ぽん}

と、くぎつて唱^{とな}えていたという。

あてものの遊び

鹿の角なら二本にきまつているようなものだが、これは角の又^{また}がいくつに岐^{わか}れているかというこ^ごとらしい。御存^{ごぞん}じの通^おり牡鹿^{おしか}の角は、成長するにつれて枝の数が多くなり、五本ぐらいがまず大鹿である。単に子ども^{りようし}の指の遊びに似つかわしかったというだけでなく、山の獵^り師^{ようし}にとつても重大な問題で、毎度おそらくは声を立てずに、こうして指を出して相手に知らせ、または噂^{うわさ}をしていたことがあつたらうかと思う。それを子どもが遠い遠い昔に学

んで忘れずに持ち伝えていたものらしい。今日の語でいうと、この遊戯は生活に即している。

これがもし琵琶湖岸の片隅びわこがん かたすみに、たった一カ所しかない例だつ

たら、或いは近年米国の宣教師が来て、教えて行つたろうなどと、ありもせぬことを想像してすます人が多かつたろうが、幸いなことには九州に一つ、飛び離れて同じ「鹿なんぼ」の遊びがあつた。久留米くろめ中学校の峰元みねもと君は、近ごろ市中でこの遊戯を子どもがしているのを見かけたと報ぜられた。それから附近の村里を問合せてみたが、三井郡みいにはたしかにあつて、他の郡にはまだあるという人を知らぬという。私も強い断定は差控さしひかえるが、これは近江おうみから、または近江へ、ちかごろ輸入したものでないということは

まあ言えそうである。

ただし詳しい方式はもう一度見なおす必要がある。熱心なブリウスタア氏に知らせてやりたいのは、久留米の方でも背なかを叩かないかどうか。「鹿なんぼ」という文句があまり簡単だから、あるいはこれも馬乗りの方かも知れぬが、文句が残っている以上は元は拍子をとって、叩いていたのではないかと思う。

これによって、ふと心づくことは、今でも東京の小学校の子どもが、別れるときなどにちよいと立ちもどって、

おみやげ　三つに　気がすんだ

という類の、どうしても意味のとれない文句を唱えて、友だちの背なかを打つことである。流行といつてしまえばそれでも説明はつくが、あまりにも無意味だから何か別の形があり、それが鹿・鹿・角・何本でないまでも、少しはこれに近いような「あてももの遊び」が、行なわれていた名残りではないかと考えている。人の背なかを打つということは、そう軽々しい戯れではない。それでも喧嘩にはならぬだけの約束が、かつてはこれを許していたもの、といつても理由が一つあるのである。

かごめ・かごめ

遊戯の童言葉わらわことばとは、本来は歌と舞まいとのように、表裏不可分のものであつたらしい。新しい小学校の遊びにも、なるべくは唱歌を添えて与えようとしているが、文句がやや混入まじいしているためだろうか、言葉に力を入れすぎて所作しよさの方が軽く取扱われ、もっとも熱中する遊戯にはかえって黙演もくえんが多い。自分はこの二つのもののしつくりと結び合っているか否かによつて、子ども遊びの新旧が窺うかがわれるように思うが、どんなものであろうか。

二つの例を拾ってみるならば、このごろはもうあまり耳にしない遊戯唄ゆうぎうた、

めぐれど端無はしし たまきのごとくに……

という変つた節ふしの文句は、調べたら作者のきつとわかるほど新しいものだが、これをうたうべき遊戯は前からあつた。東京などで古くから、蓮華れんげの花が開いたというのが同じもので、つぼんだ、開いたという別の動作があるが、歌の半分はやはり小さな手を繫つないで、くるくる廻っている間に歌うもので、しかもこれにはなお今一つ前の形があるのである。どうしてあのようになつても、

面白がつて続けているかと思うほど、意味の解しにくい文言の羅^ら列^{れつ}だが、「かごめ・かごめ」というのがやはりまた同じ遊びであった。

かごめ かごめ 籠^{かご}の中の鳥は いつく出やる
夜あけのばんに つるつるつーべった

或いは、

鶴^{つる}と亀^{かめ}とつーべった

ともいつている。そういうと一しよに全員が土の上にしゃがんでしまいい、そのあとで、

うしろの正面だアレ

というのもあり、また全くそれをいわないのもあるが、動いてい
る人の輪がはたと静止したときに、真^{まうしろ}後にいるものを誰かとき
くのだから、これは明らかに「あてももの遊び」の一つであつた。
子どもはもう知らずに歌っていることであろうが、気をつけてみ
ると、この「かごめ」は身を屈^{かが}めよ、すなわちしゃがめしゃがめ
ということであつた。誰が改作したか、それを鳥の鳴^{かもめ}のように解

して籠の中の鳥といい、籠だからいつ出るかと問いの形をとり、夜明けの晩などというありうべからざるはぐらかしの語を使つて、一ぺんに坐^{すわ}つてしまうのである。鹿・鹿・角・何本に比べるとたしかにこの方が試験はむつかしい。そうして数多くの子どもが加わることができて、楽しみは大きかったかと思われる。それが少しずつ形をかえて、ひろく全国の「昔の子ども」に、今もなお記憶せられているのである。

中の中の小仏

西洋の子どもの中にも、まだ幾種かの当てもの遊び（Guessing Games）が残っていることは、こういうことを書いた本によくいうが、あちらではもうその起りを説明することができなくなっている。日本ならそれが簡単にわかるのである。

子どもが手を繋いで輪つなになって、ぐるぐる廻る遊び、全国どこにもある「中なかの中なかの小仏こぼとけ」というものなどは、鹿の角を幾分か複雑にして、たくさんの児こがいっしょに楽しめるようにしただけ

で、やはり問答が中心であつた。六十年も前に私などが唱^{とな}えていた詞^{ことば}は、

中^この中^{ぼう}の小坊さん　なアぜに背が低い

親^{たいや}の速夜にとゝ食^くうて　それで背が低い

というのであつたが、この文句は皆さんの覚えておられるのと、多分は大同小異であろう。あるいは魚^{とと}の代りに「海老^{えび}食うて」という者もあるようだが、いずれにしたところで父母の命日に、そんな物を食べる人は昔は一人もいなかった。それがおかしいので何^{なんべん}遍も何遍も、同じ歌ばかりをくり返していたけれども、大阪

でも東京でも、そのあとに添えて、

うしろにいる者だアレ

または「うしろの正面だアレ」といって、その児この名を当てさせるものが多かった。或いは目隠めかくしをさせ、もしくは顔を両手で掩おおわせて、正面に踞しゃがんだ児を誰いなかさんと、いわせることにしていたかとも思われる。鹿児島県の田舎などでは、それでこの遊戯をマメエダレとも呼んでいた。マメエダレはすなわち真前誰ままえだれである。

遊びは後に少しずつ改良せられている。中の小坊の手に御盆おぼんを持たせて、誰おちやそれさん御茶あがれと言わせたり、または一つ一つ

手を繋いだところをさぐ探つて、ここは何門と尋ねる問答を重ね、答えによつてそこを切つて出るような遊びかたもあつた。いずれも小児が自分たちで考えだしたもので、そんなことに世話をやく成人はいなかつたろうと思う。それかられんげ蓮華の花は開いたといい、または「かごめ・かごめ」という文句に取換とりかえたりしたのも、あんまり上手じょうずだから別に作者があつたように考える人もあるか知らぬが、私たちは、なお、かれらの中の天才が興に乗じて言いはじめた言葉が、自然に採用せられて伝わつたものと思つてゐる。遊びはもともと輪を作つて開いたりつぼ苔んだり、立つたりかが屈んだりするのが眼がん目もくであつた。そうして歌は、またその動作と、完全に間拍まびょうし子があつてゐる。作者がほかにあつたろうと思われぬの

である。

地蔵あそび

「中なかの中なかの小坊こぼうさん」は、私などは弘法こうぼう様のことかと思つて
 いた。これを小仏こぼとけと唱となえていた子どもの、近所にあることも知っ
 ていたのである。山梨県ではそれをまた、

中じぞうの中なかの地蔵さん

とうたい、その「中の地蔵」が後うしろで周囲の子の頭たたを叩きまわって、

外の外の小僧ども そと そと こぞう なぜ背が小さいな云々 うんぬん

といっていたそうである。茨城県で地蔵遊びといったのもこれで、一人をまん中にかがませて目かくしをさせ、周囲の輪の子どもが廻りながら、やはり「なぜに背が低い」を唱える。そうしてその運動を止めるや否や、中の地蔵が一人をとらえてだれさんと名をあてる。それが的中すると地蔵が代ることは めくらおに 盲鬼の一種とよく似ている。福島県海岸地方の地蔵遊びのことは、前に『日本の伝説』の中にも述べておいた。これは輪の子どもが口を揃えて「中の中の」の代りに、

御^お乗^のりやアレ地蔵様

という言葉を唱える。乗るとはその児^こへ地蔵様に乗り移って下さいということであつた。そうするうちにまん中の児は、しだいしだいに地蔵様になつてくる。すなわち自分ではなくなつて、色々のことを言い出すのである。そうなると他の子どもは口々に、

ま
^{もの}物^{おし}教えにござつたか地蔵さま 遊びにござつたか地蔵さ

と唱え、皆で面白く歌ったり踊ったりするのだが、元は紛失物^{もと}な
どの見つからぬのを、こうして中の中の地藏様に尋ねたこともあ
ったという。

古い『人類学雑誌』に出ていたのはもとは仙台附近の農村で、
田植^{たうえ}休^{やす}みの日などに若い男女が集まって、大人^{おとな}ばかりでこの地
蔵遊びをしていたそうである。これとても遊びで、信心からでは
なかったが、まん中にややお人よしというような若い者を坐^{すわ}らせ、
ほかの者が輪になって何か一つの文句をくりかえしくりかえし唱
えていると、しまいには今いう催眠状態に入つて、自分でなくな
つて色々の受返^{うけへんじ}事をする。いずれ男女の問題などの、罪もない
笑うようなことを尋ねて、それに思いがけない答えがあるので面

白かつたのであろうが、それが今一つ山奥の村へ入って行くと、まじめな信心者だけで集まつて、この中座なかざのいうことを聴きいていた。それが昔の世にひろく行なわれた神の口寄くちよせというものの方式だったので、つまりは子どもがその真似をくりかえして、形だけでも、これを最近まで持ち伝えていてくれたのであった。

鉤占いの話

成人と子どもと、同じ遊びをちがった心こころもち持で、持ちつづけ
ていた例はほかにもある。おとなの遊戯などということとは考えに
くいようだが、今でも元気な人たちは退屈すると、おりおり思い
ついて子どもみたようなあてものなどをする。それが案外新発明
というのが少ないのである。ことに酒宴の席では古くさいものが
面白がられる。たとえばある一人に目隠しめかくをして盃さかずきを持たせ、

こゝらか　まだまだ　こゝらか　そこそこ

などと、飲み足りなそうな人に盃をさす戯^{たわむ}れは、愚劣なものだが、まだまるつきり廃^{すた}れてもいない。これと「中の中の小坊主」のお茶あがれとは近いのである。

それからもう一つ、このごろはあまり見受けぬが、箸^{はし}とか紙漚^{こより}とかの尖^{さき}を少し折曲^{おりま}げたものを、くるくると両手^{てのひら}の掌で揉み廻し、その突端の向いて止った方角の人に、盃を押しつけるという方式がもとはあつて、その囃^{はや}し文句もよく似ていた。ところがこれと全く同じ遊びが地方では小児の遊びとして、最もひろく行なわれていたのである。

もとは全国にわたって、ほとんど知らぬ児童もなかったろうと思う。おかしいことにはそれがことごとく、隠したおならの犯人を発見する目的のみに用いられていた。四国・九州ではそれ故にヘハリカノド、またはヘヒリガンドともカネジヨとも呼ばれていた。そのカネジヨもカンドとともに鉤かぎ殿で、その小枝や細い棒さきが鉤かぎになつていたからの名であろうと、私たちは想像している。すなわちこの鉤をまわして占うらないをした目的は、最初は決して下品げひんなものではなかったのを、のちに酒飲みは盃をさす人をきめるために、子どもはただおならの主ぬしを見つける戯れだけに用いて、その他を忘れてしまったのである。上方かみがた方面の酒の席では、これをベロベロの神様といったことが記憶せられている。

ベロベロの神様は

正直な神さまで

おささの方へおもむ面向ける

面向ける

という囃し言葉を唱えつつ、なにか細長いものを手で廻したということであるが、それと同じ名前は関東・越後えちご・奥羽おうう地方まで通用していて、こちらはいずれもみな子どもの遊びであり、唱えごととは、

ベロロ カベロ 正直神で

誰^たがへをひつた

ひつた方^むさつん向け（上総^{かずさ}）

という類^{たぐい}の文句になっている。或いはまた「ベロベロカメラ、とうといカメラ」などともいうところがある。つまりは初めに、まづ鉤の霊の尊く正直なことを讃^{たた}えて、それからいよいよその指定を求め、これによつて疑いを決しようとしていたので、少なくとも方式だけは、昔の神を祭つた人々の所作^{しよさ}を、そのまま守っているのである。無心な者のすることには、うつかり看過^{みすご}すことのできないものがある。

ベロベロの神

東北で小児がベロベロの遊びをするのは、たいていは樹きの小枝の鉤かぎになったものを折取おりとつて、それを両手の間にまわして、あのおかしな文句を唱となえるのだが、時としては萱かやとか藁わらとかの一本の茎くきを折曲おりまげてすることもある。ベロベロという言葉が最初からなにか滑稽こっけいな意味をもっているように思う人もあるかは知らぬが、実際は決してそうでなかった。長野県の北部などでは、正月の三日をベロベロの歳取としとりと称して、小枝でそういう鉤をこしらえて

さんほうおしき

かみだな

三方折敷に載せて神棚に上げておく家もあり、またはもう、

そういうものは作らずに、ただこの名称だけを知っている家もあ

るが、とにかくこれには少しも戯れたわむの心こころもち持は伴わぬのである。

おうしゆう

いなか

奥州の田舎では以前まだ定まった墓地がない時代に、葬式当

日に行列の先に立つ者が、このベロベロを廻して送るべき方角を

きめたという話なども残っている。非常に子どもらしい素朴そぼく過ぎ

うらな

た占いしかただけでも、前にはこうして右か左かの疑いをきめる

という信仰もあったのではないかと思われる。

そんならどういふわけでその尊い、また正直な鉤の神にベロベ

ロなどという名をつけたろうかという問題が起る。私たちの想像

では、ベロベロとは嘗なめることで、舌したの田舎言葉をベロというの

も、元はそれから出ているのかと思っている。今でも子どもがベロベロの神を廻すのを見てみると、これを両手で高く口の前まで持って来て顎あごの下あたりで揉み廻すので、ちょうど鉤のさきを鼻と見立て、その細い棒の後から、声が出て行くようにしていたようである。きわめて簡単なものだが、この鉤を一つの人形にんぎょうのように見ることが許されていたのではあるまいか。

人形が今のようになつたのは、わが邦くにでもそう古いことではない。東北で盲めくらの巫女みこが舞わせているオシラサマという木の神は、ある土地では布ぬので掩おほうた単なる棒であり、また他の土地では、その木の頭に眼鼻口だけを描いてある。そうしてこれをカギボトケという名などもまだ時々は記憶せられている。信心な人た

ちの強いまぼろしでは単なる鉤ある小枝でも、なお有ありがた難い神の姿に見ることができたので、それを祭をする人の口の前に持つてくることが大切な条件ではなかったかと思う。東京でオシヤブリ、関西でネブリコなどという木の人形も、これを轆轤ろくろでひいて今のコケシボコにするまでの、元の形というものがあつて、それがのちには幼い者の手によつて管理せられることになつたのではあるまいか。

おもちやの起り

おもちや
玩具を面白がつて集める成人が多くなつた割には、古いこと
がまだ一向わかつておらぬが、近年ブリキ・セルロイドが目まぐ
るしく新を競うようになるまでは、われわれのおもちやは不思議
なほど種類が限られていて、どうやらその一つ一つから根^{こんげん}原を
尋ねて行かれるらしく思われる。だいたい、以前の玩具はほぼ
三通りに分けることができたようである。最も数多いのは子ども
の自製、拾つてすぐ棄^すてる草の実やどんぐりのようなものから苗^な

株^{えかぶ}あねごとか、柿^{かき}の葉人形とかの、うまくできたらなるだけ永^{なが}く大事にしてしまつておこうとするものまで、親も知らないうちに自然^{ととの}に調えられる遊び道具、これを子どもは「おもちゃ」というものの中に入れていない。

オモチヤという語のとは、東京では知らぬ者が多くなつたが、今も関西でいうモチヤソビの語に才をつけたものにちがいない。その弄^{もてあそ}び物を土地によつては、テムズリともワルサモノともいつて、これだけは実は母や姉の喜ばぬ玩具であつた。もつとも普通に使われるのは物さしとか篋^{へら}の類、時としては鋏^{はさみ}や針などまで持ち出す児^こがあつて、あぶないばかりか、無くしたり損じたりするので、どこの家でもそれを警戒した。そうしておいおいとその代

りになるものを、こしらえて可愛い子には与えたのだが、最初はそれもただ親たちの実用品のやや小形のもの、たとえば小さな籠かごとか桶おけとか、箒ほうきや農具たぐいの類が多く、子どももまた成人と同格になったと思つてそれを喜んでいたようである。

それから第三には、買うて与える玩具、これが現今の玩具流行のもとで、形には奇抜なものが多く、小児の想像力を養うには十分であつたが、如何いかんせん、そういう喜びを味わう折が以前はきわめて少なかったのである。おみやげという言葉でもわかるように、本来は物詣ものまいりの帰りに求めてくるのが主であつて、したがつてその種類も限られており、だいたいにお祭に伴なうものばかり、たとえば簡単な仮面かめんとか楽器とか、または神社から出る記念品の

ようなものであったことは、深い意味のあることなのである。その一つ一つについて話をしてみれば面白いのだが、それではあまり長くなる。ただここで私のいいたいのは、あんなオシャブリのような小さな玩具でも、やはり最初は、御宮^{おみやげ}笥であり、すなわち日本人の信仰から生まれて、発達したものだということである。

木の枝の力

今の人には何でもない木の小枝の鉤かぎになつたものなどが、昔は非常に重要にみられていたということは、必ずしも小さな発見ではない。金属工芸の進まなかつた時代から、土を耕す鋤くわはすでに備わり、また火を焚たく炉の上の鉤も欠くべからざるものであつた。これに天然に備わつた物を用いようとすれば木の枝より以上に丈じ夫ようぶなものではなかつた。すなわち昔の人たちは自分の体験によつて、つとに木の枝の強い力を認めていたのである。

三重県の北部から滋賀県の甲賀地方にかけて、春のはじめに神様を山から、里さとの方へ御迎え申す作法として、鉤かぎ曳ひきという神事がある。神木に張り渡した太い注連繩しめなわに、木の鉤を懸かけて歌をうたいつつ曳ひくのである。

東北地方では一般に、峠とうげ路みちの辻つじや入口にある大木の高い枝に、鉤になった小枝を下から投げあげて引懸ひっかかるかどうかを試みる占うらないがあつて、時々は無数にその小枝の懸かつてゐる樹きを見かけるが、それを鉤懸かぎかけもしくはカンカケといっている。讃岐さぬきの小豆島どしまの寒霞溪かんかけいもそれらしいから元もとはこの方面にも同じ風習があつたかと思われる。今日では小石を石の鳥居とりいの上に乗せて見ようとし、または沓掛くつかけといって、馬の沓くつや古草鞋ふるわらじを投げあげる

ようにもなっており、子どもや若い者の慰みくらゐにしか考えられておるまいが、かつてはまじめに或る旅行の成功するか否かを、鉤によつてたしかめてみるという信仰があつたのである。

それよりも今一段と子どもらしい方法、したがって今では子どもしか試みない戯れに、^{こころ}鉤引^{たわむ}というものがあることは知つてゐる人が多かろう。東北ではこれも小さな木の枝の鉤で、それ故に主としてこれに用いられるしなの木などを、今も子どもはカギヒコノキと呼んでゐる。この遊びをする日が、特に正月の松の内^{まつうち}となつてゐるのは、由来^{ゆらい}の久しいことかと思う。他の地方に行くと春もたけてから、路傍の車^{おおばこ}前の茎^{くき}を折曲^{おりま}げて引懸^{ひっか}け引張^{ひっぱ}り、^{すみれ}たは堇^{すみれ}の花の馬の首のようになった部分を交叉^{こうさ}して、むしろその

首のたやすくもげて落ちるのを、笑い興ずるようになっていたが、二つは最初から別々の遊戯であろうとも思われない。すなわち、子どもの遊びには遠い大昔の、まだ人間が一般に子どもらしかった頃に、まじめにしていたことの痕跡こんせきがあるのである。

念木・ねんがら

こういう話をしていると、自分の幼いころが際限もなく思い出される。秋の末に稲が刈り入れられて、水田の土がまだじくじくと柔かい時分に、日が暮れて寒くなるまで家に帰ることを忘れ、着物をよごして来てよく叱られた遊びがある。関東ではひろくネツキともネンボウとも呼んでいるが、それがまた木の鉤のさきを尖らしたものを、柔かい田の土などの中に打込んで、相手の立たのを倒す遊びであつた。

ちようど片仮名のイの字を逆^{さか}さにしたような棒で、現在は鉤の
 全く取れたただの木切れ^{きぎ}を尖らせて打つ地方も多いようだが、私
 などは鉤が有るために面白く打てたのだと今でも思っている。庭
 はたけ
 や畠で遊ぶと叱られるから田へ行くだけでなく、全く刈田^{かりた}の頃^{ころあ}
 合^いの柔かさを、搜^{さが}してでも子どもはそこへ集まったのである。
 打ちかたの巧^{こうしや}者によつては自分のネンボウは深く刺され、同時
 に敵のをはね出して倒す。そうするとその棒をこちらへ取つてし
 まうのである。いろいろと工夫^{くふう}をして自分の得手^{えて}に合うようなの
 を削り上げ、それには名前をつけておいたりする子どももある。
 勝った獲物を一^{ふたかかえ}抱^{みかかえ}も三抱^{みかかえ}も、物置^{ものおき}の隅^{すみ}にしまっておいて、
 風呂^{ふろ}のしたに焚^たかれてがっかりした記憶も自分にはある。

この遊戯は以前は全国的なものだったのである。したがってそれを詳しく説明する必要はまだないかも知れぬが、ここで私の考えようとするのは名称であつて、それが不思議なほど南北に共通しているのである。もつとも東北の端はしの方だけはこうがいう筭打ち、またはツクシ打ちという名もありその他にも少しずつちがつた地方名はあるけれども、だいたいにおいてネンという言葉が行き渡っている。関東平野でもネン棒があり、またネン木と謂いつたところもある。ネツキ・ネツクイは根本・根杭であらうと、字を学んだ子どもはおよそ想像しているが、実は枝のさきを切つて作るの、ただ土の中へ刺し込む点が、根と呼ぶのにややふさわしいだけである。言葉はこういう風ふうに形と心こころもち持もとが、別々に移り動くも

のであるらしく、また必ずしも、学者によつて吟味せられてもいない。私の心づいたのは、このネンは別に起りがある。或いは念の字の音であつて、やはり中古から言い始めたのかも知れない。そうするとこの名前よりも遊びの方が古く、またもう一つ前の名があつたにちがいないのである。

燈台もと暗し

いわゆる根^ねツ木^きの問題には限らず、我々がお互いに話し合ってみないために、覚るべきことを覚らずにいる場合ははなはだ多い。私がこんな小さなことに力を入れるのも、目的はもつと自分の中にある「日本」を見つけ出してもらおうがためである。各地から寄り集まっている人々の話題を、できるだけ朗^{ほがら}かな楽しいものにした^いからである。

まちがっていたら正してもらおうようになるべく多くの地名を掲

げる。^{とが}尖った木の棒を土の上に突き立てて相手の立てたのを倒し
 合う競技を、関東とその周囲の県ではネツキという者が多く、ま
 たネンボウという名も伊豆^{いず}あたりまで行なわれている。それより
 ももっとひろいのは、北陸では能登^{のと}の七浦村^{しつら}などというネンガラ
 ウチで、ここでは村の鎮守^{ちんじゅ}の御祭^{おまつり}の日の遊びだが、西の方に
 行くとそれが子どものただの遊びとなっている。たとえば鳥取市
 の附近の村でもネンガラ、ここでも稲刈^{いねかり}後の田へ出て遊ぶ。次
 には山口県の豊浦郡でもネンガラ、海を渡って筑前^{ちくぜん}の大島でネ
 ンガラ、これも遊びかたは同じだが、注意すべきことには御産^{おさん}の
 あった家の前で、子どもがこの木を組んで産屋^{うぶや}というものを立て
 るという。しかしもう一度尋ねてみなければ詳しいことは言えな

い。

それから西へ廻つて長崎県の下五島しもごとうにもネンガラ打ちの遊び

があり、さらに熊本県の天草あまくさ下島しもじまでも旧十一月丑うしの日の山の

神祭の前に子どもが、手頃てごろの木を伐きつて来て、このネンガラを作

つておいて祭の日に遊ぶというのは、いよいよ信仰上の儀式であ

つたことを思わしめる。同じ遊びはまた阿蘇郡あその山村にもあるが、

ここでは少しかわつてネンゴロといっている。鹿児島県の甕こしきじ

島まへ行くと上かみ甕こしきの方ではネンガラまたはネンガネ、この力

ネはベロベロの神をカネジヨというのと同じで鉤かぎのことらしい。

下甕しもこしきの手打港てうちこうなどはこの遊びをネンウチ、それで遊び道具

の方をただネンと呼んでいるが、起りの一つであつたことは疑い

がない。昔は九月九日の節供せつくの日の子ども遊びであつたというが、
今ではもう常の日にもすることがあるらしい。奄美大島あまみおおしまのよう
な遠い島にも、やはり古くからそのネンウチの遊びはあり、その
木をネンと呼び遊びかたもよく似ていた。人のネンを打倒うちたおして
手の幅一つだけ離すことができれば、それを取って自分のものと
したという。ただこれらのネンを絵にかいたのを見ると、関西各
地のものには私たちの重要視している鉤の枝のないものが多い。
いつからなのか考えてみたいと思つてゐる。

ねぎいと

ネンウチは念^{ねん}打^{うち}と字に書くのが本^{もと}の意にかなうものかと思う。或いはあまり念が入りすぎるかも知れぬが、もう少しばかり他の土地の例をならべると広島県の海岸地方にも、ネンがありまたネンウチの遊びがある。倒して相手のネンを取るほかに、はじめから下手^{へた}で地面に立たなかったものも次の番の児^この所得になる。どういうわけか、それをグツソウと子どもはいつている。ネンギリという名前が備^{びん}後^ごの府中などにはある。打つという代りに切る

ともいつていたのか、或いはまた別の言葉だったかも知れぬ。豊ぶ前のぜん築ちくじょう上郡などではこの木の棒をネンギ、伊予いよの宇和島うわじまではこれをキネンといい、またネンガリともいうのは日本海側のネンガラと似ている。

近いところでは神戸こうべにも、このネンガラという語が行なわれていた。現在はもう木を尖とがらしたものでなく長さ四、五寸の鉄の棒の、さきの尖ったものを用いるというが、もちろん今はもう見られぬであろう。私などもまだ播ばん州しゅうにいたころ、大きな西洋せいよう釘くぎに紙の総ふさを附けたものを、地面に打付けているのを見たことがあるが、危あぶないといって持つことを許されなかった。しかしああいうものではとても関東などの根木打ねつきうちの面白さは味わえなかつ

たろう。以前の競技は青年も加わり、それよりももっと複雑な、かつ興味の深いものではなかったかと思う。

有馬郡有野ありま　ありのの唐櫃神社からとに伝わっているネングイというものなど

は、正月二日の鬼打神事おにうちしんじの一部で、はじめに的射まといの式があつて

そのの終った後、弓を地上においてその弓弦ゆみづるの前と後とに、櫓はげ

の木で作った杭くいを六本ずつ二度、合せて二十四本打ちこむ。　　閏うるう

年としには二十六本、すなわち十三本の倍数を打つというから、多

分はこれに由よつて月々の吉きつきよう凶ぼくまたは晴雨を卜したのだらうと

思うが、現在はもう自信がなくなつたものか、それぞれ適當の場

所に手を持ちそえて刺しこむことにしている。そういつた変化は

他の土地の、的射の式などにもおりおりに見られる。

つまりは成人の間ではただ形だけを残し、その面白さの方は子どものみが相続しているのである。尾張おわりの知多ちた半島などでこの遊びをネギゴトといい、それに使う木の棒をネギというのも、同じねんぎ念木ねんぎという語の地方音だったかも知れぬが、別にこれを願ねがいごとごとまたは禰ね宜事ぎことと解してもよいような感覚がなお残っていて、二つの心こころもち持もちが融合したものとみられる。ことに小児は単純だから、毎度こういう思いちがいをしやすいのである。

弓太郎と念者

弓箭^{ゆみや}は農民の間では早くから、神祭の折にしか用いられていなかった。従つてその技能は劣つていて、実際の役に立たなかつたのである。私の知つてゐる三河^{みかわ}の或る山村では、氏^{うじ}神^{がみ}の祭礼に金^{きん}的^{てき}を射^いあてる神事がある。箭^やが的^{まと}を射^い貫^ぬくとの場的^{まと}場の土といつしよに的と箭とを三^{さん}方^{ぽう}の上に載せて神前に供^そえ、それをもつて祭を終ることになっており、祭の前にはみな一生懸命に弓の稽古^{けいこ}をする。もし中^{あた}らなかつたらどうしますかと尋ねてみると、何日

でもあたるまでは御祭おまつりが続くのだそうである。しかしどうしてもあたらぬ時には仕方がないから、神主かぬぬしが箭を持っていって、金的つきさに突射すのだという話であつた。

四国や九州で百手祭ももてまつり、または御的射おまといの神事といっているのは、的も大きく距離も近くしてあるようだが、射手いてはたいていの場合には少年であつて、みな前々から精進しょうじんをして練習する。そうして各自の部落を代表して、あたればその村が神の思召おぼしめしにかない、一年中の仕合せを取るとしていたのだから、周囲の人たちも今日の声援団以上に力ちから瘤こぶを入れたのである。的射に出る少年選手は弓太郎などと呼ばれ、それを出す家には親類から祝い物を贈ってくるような土地もある。式場には多くの人が出席して、

世話をしたり力をつけたことは無論である。朝廷や京都の大きな御社おやしろにも、中世以前からこれとよく似た賭弓のりゆみの御式おしきがあつて射手いては右左に分れて勝負を競うほかに、おのおの一方の声援者があり、それを念人ねんにんといつていたことは記録にしばしば見えてゐる。すなわちめいめいの選手が勝つことを、心の中で念ずる役である。

少年の箭数問やかずい寄る念者ねんじゃぶり

という近世の発句ほつくがあるが、その念者もまた元もとは右にいう念人と同じであつた。われわれのネンボウ・ネンガラ遊びには、もは

や年を取った念者の来て見る者は無くなっていたけれども、仲間なかまがこの勝ち負けに力を入れる熱心さは、純然たる遊戯になるまでなお残っていて、それが暗々裡あんあんりに競技の興奮を忘れたいものにしていたように思う。相撲すもうとか競馬とか鶏とり合せとかのごとく今まで成人の念者がたくさんに押掛けるもの以外に、盆ぼんや正月の綱つ曳なひきのように、ちょうど成人から子どもへの過渡期にあるものもあれば、さらにまたこのネン打ちや、次にいいたいと思うハマの遊びのように、ほとんど子どもだけしか面白がらぬ競技もあって、それがことごとく最初は神様の祭から出ていることは、子どもを愛する人々の回顧せずにはいられぬ歴史である。

大人から子どもへ

児童に遊戯を考案して与えるということは、昔の親たちはまるでしなかったようである。それが少しも彼らを寂しくせず、元気に精一ぱい遊んで大きくなっていたことは、不審に思う人がないともいわれぬが、前代のいわゆる児童文化には、今とよっぽど違った点があつたのである。

第一には小学校などの年齢別制度と比べて、年^{としうえ}上の子どもが世話を焼く場合が多かった。彼らはこれによって自分たちの成長

を意識しえたゆえ、悦よろこんでその任務に服したのみならず、一方小さい方でも早くその仲間に加わろうとして意気こんでいた。この心理はもう衰えかけているが、これが古い日本の遊戯法を引継ひきつぎやすく、また忘れがたくした一つの力であつて、御蔭おかげでいろいろの珍しいものの伝わっていることをわれわれ大供おおどもも感謝するのである。

第二には小児の自治、かれらが自分で思いつき考えだした遊びかた、物の名や歌ことばや慣行の中には、何ともいえないほど面白いものがいろいろあつて、それを味わっていると浮世を忘れさせるが、それはもつと詳しく説くために後あとまわしにする。

第三には今日はあまり喜ばれぬ大人おとなの真似、小児はその盛んな

成長力から、ことのほか、これをすることに熱心であつた。昔の大人は自分も単純で隠しごとが少なく、じつと周囲に立つて視つめていると、自然に心こころもち持の小児にもわかるようなことばかりをしていた。それに遠からず彼らにもやらせることだから、見せておこうという気もなかつたとはいえない。共同の仕事にはもとは青年の役が多く、以前の青年はことに子どもから近かつた。故に十二、三歳にもなると、子どもはもうそろそろ若者入りの支度をする。一方はまたできるだけ早く、そういう仕事は年としした下の者いなかに渡そうとしたのである。今でも九州や東北の田舎で年に一度の綱つなひき曳という行事などは、ちようどこの子ども遊びとの境目さかいめに立っている。もとは真面目まじめな年としうらな占うらないの一つで、その勝ち負け

の結果を氣にかけるくせに、夜が更ふけてくると親爺おやじまで出て曳ひくが、宵よいのうちには子どもに任せて置いて、よほどの軽はずみでない
と青年も手を出さない。村の鎮守ちんじゅの草相撲くさずもうや盆ぼんの踊おどりなども
なそれで、だから児童はこれを自分たちの遊びと思い、のちには
そのために、いよいよ成人が後へ退いてしまうのである。

小児の役目

子どもが大きい人から引継ひきつがれた行事と、単なる彼らの遊戯と
の境目さかいめは目に立たない。ただ年月が経たつて一方がもうその重要
性を認めず、おいおいに起りを忘れてしまっただけである。中なかの中なか
の小こ僂ぼとけや念打ねんうちなどはよい例だと思うが、今一つだけもう少し
手近いのを挙げると、畠はたさく作さくに力を入れる東日本の農村などでは、
もぐらもち（オゴロモチ）の害にはいつも弱りきっている。見か
けたらすぐに退治するが、それだけではとても追いつかぬので、

春の初めの一ばん好い日、すなわち正月十五日の早天に、もぐら
 追いということをしてあらかじめ一年の害を防いで置こうとする。
 棒で肥桶こえおけの腹をこすってキーキーという音を立て、耕地の上を
 転がしてまわると鼯鼠もぐらが遁にげるといって、関東・信越の田舎いなかでは、
 今でも農家の主人が出て行つて、このまじないをする風ふうもあるが、
 別になお一つ簡便な方式を行なっている村もある。この小獣が海な
 鼠まこの香かを嫌うということは経験であつたらしい。それでこの物を
 縄なわの端はしに括くくりつけて、畠ひつばを引張りあるく風習もひろく行なわれて
 おり、その時唱となえる文句が愉快なので、小児が志願してその役に
 つく場合も多かった。必ずしも効果があると信じているわけでも
 あるまいが、久しい仕来りしきたりだから、これをせぬと氣になるためだ

ろう。いまでも子どもの無い家からは親爺おやじが出てそれをやっている。海鼠が手に入らぬと、その代りに横槌よこづちなどを引きずり、または東北ではトウラすなわち手束たわしを曳ひくところもある。これは海鼠の一名をトウラゴというから代用になると思ったのかも知れぬ。

ところがこの海鼠引きが、多くの土地ではもう純然たる正月遊びおうみになつてゐる。たとえば東北では仙台・気仙沼けせんぬまなど、西では近江の彦根ひこねでも、また京や大阪のちつとも鼯鼠おうみなどはいない大都市でも、やはり小児が町中を押しあゐりて、

おごろもちはうちにか　とうらごどんのお見舞みまいじや
おるす　おるす

というような文句を節おかしく唱える風習が近い頃まであった。
九州各地の正月のもぐら打ちのごときも、

もぐらえい、とんとこせ 隣のせつちんもりくやせ（日
向が
ひゆう
）

という類の文句は稀に残っているが、今ではすっかり果樹の豊産
を祝う式となつて、小児はただ竿で地面を叩いて喜んでいただけ
である。

鳥小屋の生活

正月はむしろ子どもには多忙な月であつた。食べねばならぬし、遊ばねばならぬし、そのほかにさらに頼まれてする仕事かとは幾つともなくあつたのである。そういう中でももぐら鼯鼠駆除のなまこ引き以上に、もっと子どもがおおよろこ大悦びで引きうけた役目は鳥追とりおいで、その日の面白さは、白髪しらがになるまで忘れずにいる者が多いのである。その理由の一つは、どんな大きな声で耳の割れるほどわめいてもよかつたこと、それから今一つは子どもばかりで、二

夜も三夜も屋外の仮小屋に、親を離れて寝起き飲食するというこ
 とであつた。楊やなぎや白膠木ぬるでの木を削つていろいろの飾りをつけた祝
 い棒がこのために銘めいめい々に与えられる。それでたんと横木を
 たたいて、心まかせに鳥を追う詞ことばを唱えるのが、いわゆる鳥小屋
 の生活であつた。それ故にこの小屋をまたワアホイ小屋・ホンヤ
 ラ堂などという類たぐいのおかしな名で呼ぶ土地が多いのである。ワア
 ホイはもちろん鳥を追ひ散らすおどしの声、ホンヤラも後から駆
 り立てる声だつたとみえて、二月・十二月の風の神送りなどにも、
 こういう囃はやしを用いている例がある。ただ正月の雪の中では、ま
 だ駆逐すべき害鳥が眼の前にはいないのだから、当の本人たちが
 かえつて言葉の意味を理解せず、今はもうむやみに興奮して騒ぐ

だけになっているのである。

村の鳥追いの詞は誰が考えだしたかしらぬが、よほど古くから今あるものが行なわれていた。それを少しずつ子どもはまちがえて歌うのだが、

朝鳥ほほほ 夕鳥ほほほ

長者どのゝ垣内は

かくち

鳥もないかくちだ

やいほいばたばた

こういった文句が東北には広く分布する。そうして現在でもや

はり朝早くと、日の暮れ方とにはことに大声でわめくことになっている。山形県の海岸一帯から越後えちごの粟生島あわふじまあたりにかけて、この「夕鳥」をまたヨンドリほいともうたい、それで小児が手に持つ木の棒を、ヨンドリボウと呼んでいる土地がある。名前は土地ごとというほども変っているが、日本全国どこすみの隅に行っても正月はこの棒を持たぬ子どもはなく、しかも鳥追い以外にもこの棒の大きな力は、一般に今なお承認せられており、それで彼らはまた正月の任務を欣々然きんきんぜんとして引受けていたのである。

祝い棒の力

小児は全体に木^き切れを持つて遊ぶを好み、それを持つとかならず少しばかり昂^{こうふん}奮する。なんでもないことのように我々は考えがちだが、実は隠れたる由^ゆ来^{らい}のあつたことかも知れぬのである。ことに目にたつのは正月の十五日前で、これを子どもが持つと、ちようど神^{かんぬし}主^{しやく}さんの笏^{せんす}や扇子と同じく、彼らの言葉と行ないに或る威力がある、という風^{ふう}に昔^{むかしもの}者は今も感じている。単に目に見えぬ害鳥虫をあらかじめ駆逐し、または果樹^たを叩いてその木

を豊産になしえたのみならず、若い女性の腰を打てば、みごとな
児こを生むとさえ信じていた時代があつた。だから、

だい
大の子小この子十三人云々うんぬん

という歌があつて、この祝い棒をダイノコと呼ぶ土地もあり、ま
たは、

男ぼっこ持ちやがれ

などという悪口に近い詞ことばさえもあつた。東部日本ではヨメツツキ

または嫁よめ叩たたき棒、九州の各地でハラメン棒、対馬つしまでコツパラなどといったのも、すべてこの正月の祝い棒の名で、集めていると
きりがなが、いずれもこの木切れに女を孕はらませる力があると思
っていたからの命名である。祝い棒にはいろいろの装飾が施され
ていた。色紙を貼はったり彩色をしたり、または左巻きと称して樹き
の皮を巻き、燻いぶして型をつけたものもあるが、最も古風なのは精
巧な削り掛けがしてあった。それを手に執とると、実際もう常の心
ではおられなかったのかと思う。

鹿児島県の一部などでは、この棒をダシヤレ棒ともいつている。
大歳おおとしまたは十四日の年とし越こしの晩ばんに、家々の門に来てこれを振り
まわし、ダシヤレダシヤレ、またはハーラメダーセ、すなわち孕

み女を出せとわめくのである。現在はいよいよお菓子や餅を与えて帰すだけだが、固い家では表口に俵をならべその上に花嫁を坐らせて、尻を打つまねをしてもらう土地も他県にはあり、または子のないのを歎く女が、所望して打ってもらうという例さえ稀にはあつた。『枕草子』には宮中の人たちが、隠れて女を打とうとしたことが面白く書いてあるが、無論こういう行事は戯れになりやすく、小児はまた決していたずらが嫌いではない。だから中央部がはじめで、しだいに今日の公認せられた悪戯となつたのである。あるいは粥杖というので別もののごとくにも見えるが、それもまた一つの祝い棒の役目から出た名であつた。

力あることば

正月十五日の前の晩に、子どもが人の家の前に来てわる口を言う風習が、稀^{まれ}にはまだ農村には残っている。羽^う後^ごの飛^と島^{びしま}などではそれが必ず両の手に一本ずつ、ヨンドリ棒を持っていてするこ
とにきまっていた。家の男女の一年間の隠^{かく}しごとを、随分と露骨
にいつてしまうのだが、それを黙って囲^{いろ}炉^り裏^りばたで首を垂れて聴^き
いているのだそうである。小児はもちろん人の秘密などは知らない、
または片はし知ってもそれを言い現わす言葉はもたない。だ

から若い衆などがついて来て、小声でその文句を授けるのが例であつたというが、そのようにしてまで小児の口から、常は言わないことを言わせていたのは、つまりはこの正月の祝い棒の力を認めていたからであつた。

早川孝太郎君の『飛島図誌』に、このヨンドリ棒の絵が出ている。鳥追いの日が過ぎると背戸せどの樹きの下などに、その毎年の棒を積み重ねておくという。ヨンドリ棒については言ってみたいことが色々あるが、子どもに関係がないことだからごくざつと述べると、この棒の材料は桑くわの木で、上端を削って眼鼻口を描いたのが、我々の問題にしているオシラサマとよく似ている。奥おうしゅう州でオシラサマという木の二本の切れを持って、神の言葉を伝えるのは

小児でなく、イタコまたはモリコと称する盲目の婦人であるが、この二つの間には共通点があるのみならず、小枝の鉤かぎになつたベロベロの神、一名カギボトケというものも元もとは同じ目的に使われた。それが今はただ児童のあてもの遊戯の中に、幽かすかな残形を留とどめているのである。

大人がおとなこういうことをするのはもう阿呆あほうらしくなつて、自然に子どもの真似をするのは放任したという場合もあつたと思うが、別に最初から小児を適任とし、彼らに頼んでさせたという行事も、一部にはたしかにあつたのである。たとえば年取つた者ならまだ憶おぼえているだろうが、近畿とその周囲の昔かたぎの家々で、正月元日の朝の起きぬけに、特に彼らをして言わしめた詞ことば、

ゆの木の下のおん事は

さればその事めでとう候そうろう

という問答などは、意味は分らぬなりに久しく守られていた。私たち兄弟も元はそれを言ったことがある。そうしてなんだか大切なものであつたように今にいたるまで印象づけられている。

ゆの木の祝言

『日本外史』を読んで、笠置^{かさぎ}の山の行宮^{かりみや}の御夢に、二人の童子が現われて楠^{くす}の樹^きの下を指ざし、爰^{こゝ}ばかりがせめて安らかなる御座所と、御告げ申したという記事に接するごとに、いつも子ども心には、あの「ゆの木の下の御事」を聯想^{れんそう}せずにはおられなかった。そうしてこの二つはまるで関係のないことではないように、今でもまだ考えられるのである。

ゆの木を私たちは柚子^{ゆず}のことかと思ったので不審であつたが、

これを土地によつては、

やなぎの下のおん事は

と言わせていた家もある。ユというのは「ゆゆしい」などのユで、
 元は齋もと いみの木または祝いの木のことであろうから、或いは最初門かどま
 松まつなどの下に立たせて、子どもにめでたいことを唱となえさせる習
 いがあつたのかも知れぬ。信州の松本などには、盆の七日にも柱
 を立てて、その柱の根もとに一人の児こを坐すわらせて、祭をしたとい
 うことが、たしか天野氏の『塩尻しおじり』に見えている。神の依よりた
 もう木から我々の中へ尊い言葉を伝えるのが子どもの役であり、

それがまた正月の御祝い棒に言葉を神聖にする力が籠るとした古代人の理由かと思う。

しかし小児はそんな古い由緒を知らない。それに親たちの心ころもち

持までは呑みこめぬ者が多いので、いつしかこの特権は濫用せられるようになった。一方にはこれを詮もないことだとあ

ざ笑うような気風も、夙く文化の中心地には起っていたのである。

安楽庵策伝あんらくあんさくでんの『醒睡笑』せいすいしょうは、元和年間げんなに書き上げたとい

う笑話集だが、その中には「祝ひ過ぎるも異なるもの」という題で、そのような例が数多く出ている。

曰く鍛冶屋いわかじやの長佐といひて西洞院にしのとくいんにありし。物いはふこ

と人に過ぎたり。年の暮に孫の七八つなるを近づけ、元日にわが

顔を見、日本のかなとこは皆ぢいのかなとこぞといへと懇ろねんろに教へし。あくる朝、やれ松千代まつちよ、昨日きのうのことはといふ時、日本のかなしみは皆ぢいのかなしみやといへり。

今でもこれに似た笑い話は、ぼつぼつと生まれつつあることと
 思う。無心な小児の言葉には思いがけぬ啓示のあることも事実だが、あんまりそれに重きをおいていると、時々は興のさめるようなことにも出遇であうので、まして西洞院の鍛冶屋の隠居のように、わざわざ工作を加えたのはたいていは結果がよくない。ところが昔の村の人たちなどは悠長ゆうちやうで、そう大して気にもかけずに子どもにはいいたいことをいわせて、おかしいことをいえばただ笑つて、古い仕来りしきたの少しずつ變つて行くのを、自然のままにまか

せていたのだから面白い。おかげでまだ色々の昔が子供の間に残っている。

千艘や万艘

東北では正月の春田打ち、または田植と称する行事が、土地によつては今もまだ少年少女の領分である。

明^あきの方から早^さ乙^お女^{とめ}が参つた

といたり、または、

たうど
田人に来たよ　小苗^{こなえ}ぶちが来^きいした

などといって、彼ら自身もなんのことだか知らずに、ただまわつてあるけば餅^{もち}が貰^{もら}えるものだと思つてゐる。それに相応の受け答えをして、心よく用意の餅を出して与えるのみか、それが来なくなるのをなんとなく淋^{さび}しく思つてゐる家もまだ多い。正月はもちろん田植の季節でないが、もとは一年のはじめに一通りそのわざを演じて、農作成功のまじないとする風^{ふう}があつて、それには外部からこういつて来る者のあることを、一つの瑞^{ずい}相^{そう}として歓迎したのであつた。ところが他の土地ではもうそのための職業団体ができたり、または貧しい人たちが顔を包んで、門に立つたりする

ことがはじまって、なんだか品の悪いものとして、親も学校も制止するようになり、子どもの正月の楽しみはまた一つ失われた。

これと似よった例は四国の粥釣かゆつりや御祝いそ、中国地方のコト

コト・ホトホト、またはトロベイ・トヘイなどというもの、九州

・奥おうしゅう州

の両端にあるカセドリなど数えきれぬほどの種類を私

は知っている。起源は少しずつちがつているかも知らぬが、いずれも正月に子供の口から、めでたい言葉を聴きこうとした趣意は一つで、もしもはじめから賤いやしいと見られる所作しよさであつたら、真似をするはずもないのだから、いわば児童はお株を取られたのである。

もとよりこの変化は近ごろのものではない。東京などでもまだ

江戸といった昔、町の子どもが数人で小さな船の形をしたものがかかえ、商家の店さきに来て入船の祝言を唱^{とな}えていたということが、多くの書き物に残っているが、これなどもやはりいろいろの段階において今も諸国の船着^{ふなつきば}場には行なわれている。たとえば津軽^{つがる}の鰺^{あじ}ヶ沢^{さわ}の柱かつぎ、筑前^{ちくぜん}博多のセンザイロウなどはまだ子どもの管轄に属している。そんな話を聴^きけば珍^{めづ}しがるだろうが、東京人の中でも小さな児^こをかかえゆさぶって、

千ぞや万ぞ　お船はぎつちらこ

などと唱えているのが、やはり古い文句の記憶であり、幼い者が

それを楽しんでいるのも、
幽^{かす}かながらその相続であつた。

猿ちづ問答

今は東京市内になつた高井戸あたりの子どもが、もとは甲州街道に出て富士登りの道者に、

お撒きまやれお道者
御山おやまの天気もよかろうに

と、銭ぜにを撒くことをねだり、もし撒かずに行くとならば、風吹け雨降れというような悪口をしたということが、百年ばかり前の紀

行に見えている。百年も以前に行なわれていたものならば、古来の風習だろうと即断する人がないとは言えぬが、私には一つの零れ落らくの姿いらくとしか思われない。見ず知らずの旅人が村を通つて、遠くへ物詣ものまいりをするような場合がそう早くからあつたはずもなく、またどこに行つても見られる出来ごとでもないからである。なにかもとづくところがあつたろうとまでは考えられる。しかし少なくともこういういやなことをするようになったのは、別に新たな誘因があつたのである。

しかも道行みちゆきの多い街道筋かいどうすじ、ことに大きな神社や霊場に参詣する路みちでは、今も時々は旅客の袂たもとについて施ほどこしを求める風儀が残っているぐらいで、もちろん江戸近郊だけの特例ではなかった。

私などがこれについて思い出すのは『参宮名所図会』さんぐうめいしよずえにも出て
いる「さるちご問答」その他、旅人が最初馬鹿にしてかかった路
傍の小児から、あべこべに遣りこめられるという話で、わが邦で
はこれを西行上人さいぎようしやうにんや宗祇法師そうぎほうしの逸話として、妙に数多く各
地に伝えている。知らぬ人も少なからうがこの例を一つだけ挙げ
ておこう。伊勢いせでは櫛田川くしだがわのほとりのある村で、可愛かわいい童子が
樹きの上にいるのを見て、

さる稚児ちごと見るより早く木に登り

と口ずさんでいい気になっていると、すぐにその童子が下しもの句を

つけて、

狗いぬのような法師来たれば

とやり返したので、ぎやふんと参つて早々に遁にげ去つたという話。その「さる稚児」は今ならば目に立つほどの美少年とでもいう言葉だが、それを猿さるに引掛ひっかけて木に登りとからかうと、一方また猿に対して狗といった、つまりは平凡なただの口合いではあるが、「狗のような法師」はあのところのはやりで、旅の連歌師れんがしなどが自らを嘲あざける言葉だったからおかしいのである。児と法師との多くの問答は、いずれの土地の伝説でも、皆かならず前者の勝利をもつ

て結ばれている。その賢^{さか}しい童児は実は神様の化現^{けげん}であつたなどというのを見ると、単なる民間文芸の趣向ではなしに、或いはもと路^{みち}ばたに出て旅の参詣^{さんけい}者に呼びかけるような宗教的の職業に、子どもが参与する慣^{なら}わしがあつたのではないかと思う。

公認の悪戯

味をしめるといことが、よく子どもについてはいわれる。子どもには自製の念が乏しいのは当り前だから、してもよろしいとなるとたいていのうまいことが、癖にもなれば流行にもなりやすい。悪戯いたずらに独創のものが少ないのもそのためであつた。

大阪郊外の村里などにも、八月十五夜の団子突だんごつきがつい近ごろまであつたが、あれは全国的といつてもよいほど、各地の子どもに知られている悪戯であつた。細い長い竹竿たけざおのさきに、縫針ぬいばり

や釘^{くぎ}などを附けたものさえ関東にはあつた。それを垣根^{すき}の隙から
そつとさし入れて、縁^{えん}端^{ばな}のお月見団子を取つて行くのである。
中には家の人たちがいる前で、さして来てやつたと自慢する子
がある。取られた家でも笑いながら代りを補充したり、または十五
夜団子は盗まれるほど好^よいと言つたり、その盗んで来たのを貰^{もら}つ
て食^くべると、何かのまじないになるといふ人さえあつたのだから、
面白くてたまらなかつたわけである。

一方にはまた御手本といつてもよいものがあつた。村に嫁^{よめ}迎^{むか}
えがあると若い衆はよく酒をねだる。これを樽^{たるい}入れ、
などといつて、そつと背戸口^{せどぐち}から空^{から}の容器^{もちこ}を持込み、知らぬ間に
持つて行くのが普通だったが、或いは竿^{さお}のさきに樽^ゆを結わえて、

高^{たかべい}堀^いの外からぶら下げるといふ例も多く、熊野^{くまの}などではこれを釣^{つるべ}瓶^{びん}さしと呼んでいた。これも家の方では快く入れてくれるのだが、顔を見られまいとするところに一種の冒険味があつた。子どもはおそらく狩猟のような気持でそれを羨^{うらや}みまた真^ま似^ねたものであらう。

取られる側からいうと一種の豊富感、余つて誰にでも遣^やりたいという幸福を、味わいたい際なのだから、相手が容易^{よろこ}に悦^{よろこ}ぶ子どもならば、なおのこと取らせてやりたかつたであらう。

千葉県の農村などは苗^{なわしろ}代^{たねま}の種^{たね}蒔^まき日に、子どもは焼^{やきぎ}米^め袋^{ぶくろ}といふのをこしらえてもらつて首にかけて村中をもらいあるいた。雛^{ひな}の節^{せつ}供^くにお雛^{ひな}はん見^みせとくれといつて来る子どもは、昔も今も

炒^{いりまめ}豆や菓子が目あてであつた。関西ではこれを雛荒しという土

地が多く、愛知・岐阜の二県などは、ガンドウチという名が今もまだ行なわれている。ガンドは中世語で強盗のことだから、まず極端なる誇張であるが、以前は断りなしに雛の供物^{くもつ}を取つてゆくのが、子どもには何よりの楽しみだったらしい。やれガンドウメなどと笑いながら、勝手に炒豆や菓子をつかんで行かせた、昔の人の心^{こころもち}持は気楽でよいと思う。

左義長と正月小屋

公認せられた子どもの悪戯いたずらというのが、今日はちつともなく、以前は相応にあつたことは、可否は別として、ともかくも世の変り目である。復活させたくもないものは無論幾つかある。そういう中でもわれわれ外部の者の眼に、やや憎らしくも思われるのは正月小屋の生活、ちようど左義長さぎちようをやく前後の少年の跋扈ばつこであつた。道祖神さえのかみの勧進かんじんと称して木竹藁わらを集めあるき、少し出し惜しみをするとすぐに悪口をする。そういう悪太郎が仲間では、

幅をきかしていた土地も稀まれでない。

もつとひどいのは通行人に銭ぜにをねだり、道路に縄なわを張つてその縄に泥を塗つておくというのさえあつた。甲州の道祖神祭のごときは、その我儘わがままがことにはなはだしく、これには面白づくで青年も多数に参加していた。小屋のある場所には御山木おやまぎまたはとしがみばしらとしがみばしら歳神柱としがみばしらという木を立て、これから綱を引いて家の炉かまどの鉤かぎに、それぞれ結びつけて置くという村も多いが、憎にくまれてゐる家では飯めしどき時にやたらにこの綱を揺ゆるかされて鍋なべも薬罐やかんも掛けておくことができなかつた、というような話も残つてゐる。

そんなことまでして叱しからなかつたのは、正月ばかりは子どもらが神主かんぬしさんだから、というような考えがまだ幽かすかに伝わつてい

る土地が多いためであつた。そんなら何なにがみさま神様の神主かと問うと正月様だという人もあり、道祖神と思つてゐるものもあつて、結局はつきりとしなが、石城郡いわきの海岸一帯などには、七小屋参りと称して七つの小屋を巡拝し、またはその小屋を焼く以前に年としよ寄りたちが、御賽銭おさいせんをもつて御参りする村があるのである。それを怠る者がだんだんと多くなつて、いよいよこの小さな神主さんが荒れ出したのである。

左義長は関西の方ではただ飾り物を焼く行事のようになつてゐるが、それでもまだ少年がこれを自分の事業のように心得てゐる。中部地方から関東では一般に、大か小か一つの小屋を掛けて、その中には神壇しんだんを設け燈とうみよう明供物を上げ、子どもの仲間なかまがその

中で寝ることを「おこもり」といつている。愛知県などでは旧十月の山神祭やまのかみまつりに同じ事をするようだが、共に十五日の早そうぎ暁ようにその小屋を焼くことをもって、祭典の終りとして、は一つである。私が今住んでいる多摩川一帯の農村においては、この正月行事をサイト焼というが、藁わらで作ったサイト小屋はどの村のはちじょうじきも八畳敷ほどの大きさであつた。そこへ三つの団子を樹の枝の三つ叉またにさして、参詣さんけいかたがた村の人が焼きに来るのである。

支那事變が始つてから、遠慮をしてやめたものが多いが、ある一つの部落などは子どもが寝ているのを知らずに、その小屋に火をかけて、かわいそうなことをしたので、その翌年からやめてし

まった。ともかくも今はもう正月小屋の末期^{まつき}である。

こども組

正月小屋の中では、おかしいほどまじめな子どもたちの自治が行なわれていた。或いは年長者のすることを模倣もほうしたのかも知れぬが、その年十五になった者を親玉または大将と呼び、以下順つぎに名と役目とがある。去年の親玉は尊敬せられる実力はなく、これを中老だの隠居だのといっている。指揮と分配とは一切が親玉の権能で、これに楯たてつく者には制裁があるらしい。七つ八つの家では我儘わがままな児こでも、ここへ来ると欣々然きんきんぜんとして親玉の節度に服して

いる。これをしおらしくもけなげにも感ずるためか、年とつた者は少しでも干渉せず、実際にまた一つの修練の機会とも認めていたようである。

この子ども組の最もよく発達しているのは、信州北部から越後^{えちご}へかけてであるが、他にも飛び飛びにこれが見られる土地は多い。古くからあったものの消え残りのようにも考えられるが、それにしてはあまりに他の地方に痕跡^{こんせき}がなさ過ぎる。何か基づくところはあったにしても、それがこの程度まで制度化したのには、別に新たな原因が加わっているのではないか。興味の深い問題だと思ふ。

一つの想像は青年団の影響である。十五は昔から男が一人前に

なる年であつたが、若い衆の資格が追い追いとむつかしくなつても、實際はまだ何年間かの準備期間が必要であつた。中老など子ども組ではいばつていても、若連中わかれんじゅうに入つては使い走り、だまつて追いまわされて一向に頭があが挙らない。かれらの側からいうと、ここでまた一回の努力がいるのである。そう思つて見るときは、子ども組の活躍が何か若連中に加わる目的にばかり、集中しているようにも見られぬことはないのである。

かれらが無心なる年少者の群と、正月十五日の自由とを利用して、成人を笑わせようとする歌言葉の中にも、そういう形跡はたしかにある。正月は花やかに笑うべき月であり、また笑うとすればいずれこの辺のところに落ちるだろうが、かれらは思い切つて

成長した男女の問題を、大きな声でわめこうとしていたのである。すでに一人前の知識・感覚を持つているぞということを示そうとする態度がよく見られる。穩おんとう当でないか知らぬが親も祖父も、みんな一度は通つて来た関門であつた。それがただ少しづつ濫らんよ用うせられていただけである。

女兒のままごと

あんまり男の子の荒々しい話に片よったから、今度は方面をかえて「おままごと」の問題を考えてみよう。この遊びが日本では特別によく発達しているということを、皆さんは多分まだ心づいておられぬだろうが、同じ年をとった人たちの所作しよさを真似るという中でも、ままごとのお手本はそう手近いところにはないようだ。そうして男の子の鳥追いやもぐら打ちと同様に単なる遊戯という以上に、まだ一部分は村の公務といってもよい状態が残り伝わっ

ているのである。

これを発見するには最初にまずこの遊びに、季節または機会があるかどうかを注意して行くのがよいかと思う。カマクラと称する秋田県の雪小屋などは、以前の鳥追歌とりおいうたや御火焚棒おほたきぼうがまだ残っているにもかかわらず、今では女の児こが火鉢ひばちなんか持込んで、静かに煮炊にたきをして楽しむ場所になっている。他の地方の正月小屋でも、餅を焼いて食べ、または世話をする宿があつて、子どもばかりの食事をするのが彼らにとつては重要な事務であつた。ただしこれだけは女の子を入れない。

或いは天竜川筋の雛送ひなおくりのように、三月節供せつくの日に川原むしろに蓆を敷き、火を焚たいて飲み食いを中心にした少女の集まりがあるが、

もとは東京の近くの馬ばにゆうがわすじ入川筋の村にもあつた。ままごとの地方色はいろいろある中に、若狭わかさの常神村つねかみなどでカラゴトというのが、やはりその川原事かわらごとであつたらしい。ただし三月の雛遊びの日に限らず、盆に川原に出て川原粥かわらがゆ・川原飯を炊いて食べる方が、むしろずっとひろい風習であつた。

場所は川原でなくとも磯いそばた・海のほとり、または遠くの見える丘の上・橋の袂たもとなどを選ぶこともあつた。とにかくに屋外で食べるだけでなく、調理までをするというのが一つの特色で、それによつて辻つじめし（美濃みの）、門飯かどめし（五島ごとう）、門まかどま（紀州）などの名があり、またたいはいは中元ちゅうげんの行事であつたゆえ、全国を通じて盆かまど・ボンクド・盆飯・盆粥という例が多いのである。

る。食物を野天でこしらえるということは、大人でも興味を持つほどの珍しい事件なのに、ましてやこれに携わった者がいつの世からともなく女の童^{めわらわ}であつた。どうしてこういうことをするのかは彼らにはわからぬ。ただその面白さを忘れることができなくて、折さえあればその形をくりかえして、おいおいと一つの遊びを発達せしめたのである。

精霊飯

ままごとは親が見ても静かだしおらしくまた他日の修練にもな
 っで、同情のもてる遊びであつたが、それが最初から遊戯として
 生まれたものでないことは、盆のままごとの一つの例を見てもわ
 かる。はまなこ浜名湖周囲の村々ではシヨウロメシ、瀬戸内海のある島で
 は餓鬼飯がきめしとさえいう通り、盆は目に見えぬ外ほかじようりよう精霊や無縁ぼ
 とけが、数限りもなくうろつく時である故に、これに供養くようをして
 悦よろこばせて返す必要があつたとともに、家々の常の火・常かまどの竈を用

いて、その食物をこしらえなくなかった。それが門・辻・川原等に、別に臨時の台所だいどころを特設した理由であり、子どもはまた触よくえ穢いみの忌よに対して成人ほどに敏感でないと考えられて、特に接待掛りの任に当ったものと思われる。

お盆飯の材料は家々から持寄りもちよ、米などは貰い集めもら、野菜ものは畠から取って来てもよい。或いは大角豆ささげだけは勝手に畠に入ささげことを許していたという土地があるのも、私には意味のあることに思われる。盆に来る精霊は、大角豆畠ささげばたにしばらく隠れて居るといふような言い伝えもあるからである。地方によつては盆棚ぼんだなの供物くもつ、ことに水のこまたは水の実みと称して、茄子なすをこまごまと刻んで水と米とにまじえたものを、家々から貰もらつて来て味をつけて

煮ることもある。箸^{はし}にはかならず精霊様の麻稈^{おがら}を折って用い、めいめいが喰^たべる前にまず辻々で無縁ぼとけを祭り、または少しづつ近所の家に配ってまわるという例も多い。私はまだそういう場所に行き合わせたことがないが、小さな女の子が年上の娘の子の指図^{さしず}を受けて、まじめに一生懸命に働いていた様子はほほえましいものであつたろうと思う。一度は自分もそういうことをして来て、年を取った村の女たちが、悦んで傍から世話を焼き、またはこの食物をもらつて食べておくと夏^{なつ}痩^{やせ}せぬまじないなどといつていたのも、すべて皆いつからともない仕来^{しきた}りだからで、たとい小さな女の子のすることでも公務であり、どんなに楽しくてもそれはやはり労働であつた。

これが普通の日のただの遊戯となつてしまふ前から、ままごとという言葉はおそらくは有つたのであろう。コトというのは古い日本語で、祭その他の改つた行事を意味していたらしい。徳島県の伊島^{いしま}などでは、盆のままごとというのがこの精^{しょう}霊^{りやう}飯^{めし}の儀式のことであつた。盆以外にも同じ行事が元^{もと}は多かつたであらうが、もうその目的が盆ほどには明らかでなく、従つて人が注意をせぬうちに、追ひ追ひと變化したかと思う。

盆と成女式

盆のままごとと正月のドンドン小屋と、今一つの似た点は成長段階、すなわち子どもが大人になる境目^{さかいめ}を、かなりはつきりと区切っていることであつた。遊びのままごととは七つ八つ、もう少し大きな児^こは冷淡になるに反して、この日は年かさの親玉ともいうべき者が采配^{さいはい}を揮^{ふる}つて臨時に女の子ども組が組織せられる。讃岐^{さぬき}の小豆島^{しょうどしま}の餓鬼飯^{がきめし}などは、十六、七歳の女子のみが参与するらしく、伊予の宇和地方^{うわ}の御夏飯^{おなつめし}にも、年頃^{としごろ}の娘ばかりの

集会があるということだが、その他の多くの土地では頭に立つ女は、もう一人前に近くなつていても、これに付き随う面々は村の少女の全部で、それが組織ある行動に出づることは、左義長の子ども組も同じであつた。

そういう中でも特色のあるのは対馬の阿連村などに行なわれているという盆の十四日のボンドコであつて、トコというのがやはり釜壇かまだんのことであつた。島誌とうしのしるすところによれば、この少女団の首領は十七歳で、その指導の下に村に二カ所の大きな竈かまどを粘土と小石をもつて作り上げ、その上に台を置いて男女二つの粘土製の人形を載せる。翌十五日には、ここで飯を炊き、村の若者連の踊と芝居おどりをする組に送る例になつてゐる。信州浅間あさまの山さんろ

麓くの村では、この盆ぼん竈がまの行事をカマツコというそうだが、これにも物もの前まえすなわち成女期に近づいた女たちが率先して、米と少しの銭ぜにを持もち寄より、食物ととのを調ととのえて村の青年たちを饗き迎ようするのが定めであつた。これがいかなることを意味するかは、多分彼らにもわからなかつたろうが、少なくとも今まで全く経験せぬ心のときめきを感じたことだけが推察せられる。

男の児が盆飯を炊くという例も東北などにはある。或いは男と女と二組に立ち分れ、一方の築きいてゐる竈を壊して行くという悪い戯たずらも稀まれにはあつたということを聴きいている。女十七歳というのは少し大きくなり過ぎてゐるが、これも正月のオンベ仲間の中老と同じく、もとは単なる顧問格だつたかも知れぬ。伊豆いずの田方たがた郡

の盆の竈などは、これを作り上げる者は十四歳の娘ときまつていた。珍しい話だがその時は必ず腰巻を取って出て来た。というのは多分この日から、新たに裳もをはく者ということであつたかと思う。ここでは男の児の竈はなく、ただその少女組の竈を突き崩しに来るのを、十三歳以下の娘が協力して一生懸命に防衛するのが重要な役目であつたという。

こどもの新語

子どもは自分たちの遊戯を改良し、また発達させる能力を具^{そな}えているということが、ままごと鬼ごとの二つの遊びにおいてはこれによく見られる。盆の門^{かど}ままの行事はすでに成人が重きを置かぬようになった土地でも、彼らは一^{いちちよう}朝にしてその模倣^{もほう}を中止しなかつたのみか、むしろその中の最も面白かつた部分を残して、他を新たなる環境に適するようにかえていつて、昔の生活様式を我々のために保存しているのである。御札を言わなければならないま

い。

皆さんの郷土でままごとを何と呼んでいるか。これと今日流行の姉さまあねごととはどういう関係にあるか。とにかく子どもを理解するために、またわが身の昔を省みるために、もう少し互いに他所よそのものを比べ合う必要があるかと思う。私などにも今はまだわからぬ言葉が多いが、気長に集めているうちには、案外なことが見つかるという経験だけはもっている。たとえば備前の邑久郡おくなどで、ままごとをバエバエゴクというのは、釜かまの下に焚たく火を形容した小児語がもとらしい。

夕方子どもが食事を待つ間、明るく燃えるものに注意を向けていたことは、火と燃料とに関する多くの名称が、彼らの製作にか

かるのを見ても察せられる。九州でバエラ、中部地方でバイタ、
 モヤとかボヤとかいうのもそれであり、近畿一帯で松毬まつかさをチチ
 リ・チンチロなどというのもそれかと思う。だからバエバエゴク
 も御飯をたくわぎということに解せられるのである。下しも総うさの海
なみ上郡ではオミツチャゴというのがこの遊びの名である。今では
 あの辺でもあまり耳にしないが、もとは台所を御水屋おみずやといってい
 たので、それで煮炊にたきの真似を御水屋事おみずやごとといい始めたのであろう。
 安房半島あわに行くくとケンゴトまたはケエヤドツコ、ケというのは常つね
 の日の食事ごしらえで、その仕事をケシンといっている土地も他
 にはあるが、ケエヤドという語はちよつと解しかねる。これは力
 イヤドすなわち台所のことで、古語にもカイヤがあり、八丈島で

はカイコヤとも呼んでいる。それが若い者に採用せられたために、偶然に今も残っているのである。

しかしままごとの起りは前にもいうように、毎日の食べ物ごしらえの真似ではなかった。何か改った日の食事の物々しさと、これに伴う興奮に印象づけられて、自分も役者として働いていたのが始めであつた。それを忘れてしまうと新たにまた似合わしい名を付けて、少しずつ遊びの興味を補足して来たものと思われる。

くばりごと

ままごとはしだいに御客遊びの方へ展開していったようだが、それに入らぬ前に調理した食物を、隣近所の人たちに持つて行くという段階があつて、それが今でもなかなか人望がある。東京などの小さな女の児は、^こカランコロンと口で木履^{ぼつくり}の音をさせつつ、何べんでも御馳走^{ごちそう}をじじばばの処^{ところ}へ持つて来てくれる。富士山南の村々でままごとをコンバ、或いはオコンバというのは訪問^{ほうもんこと}辞^ばであろう。これだと盆の十五日の辻飯^{つじめし}分配の方式が、まだ

片端^{かたはし}は保存せられているのである。徳島県の北部でこの遊びをクバリアイ、飛驒^{ひだ}の高山^{たかやま}でクバリゴト、配るとするのは正式食物の贈与で一段と元の心^{もと}持^{こころもち}に近い。

甲州の北巨摩郡ではオワザツコというのが、姉様^{あねさま}ごとの方言だと郡誌^{ぐんし}にはあるが、東国ではワザツトはもと物を配るときの辞令の語であつた。どうしてわざとというかは考えて見る人もないが、近ごろの感覚では「しるしばかり」というのに同じく、われわれが最小限度、守らずにはおられぬ御義理だったので、単なる気まぐれのお遣^{つか}い物を真似ているのではなかった。

遊戯にはままごと・鬼ごとに限らず、下にコトという語を添えるものが多い。今ではゴツコ・ゴク・ゴとなり、またはナコ・ナ

ンドなどにも変化しているが、コトの本来の意味はワザ・オコナイ・フルマイも同様に、儀式もしくは祭典ということだったと思うがどうか。子どもの生活を離れて一ぺん考えて見たいものである。青森県のままごと方言は色々あるが、だいたい南部なんぶ領はオフルメヤコ、津軽つがる領はオヒルマイコまたはジサイコナコというのがひろい。ジサイコは津軽から秋田へかけて、中央でいう法事・仏事のことで、文字には持斎と書くべき語と言われている。すなわち、あの地方のままごとは、外形が法事と似ていたのである。加賀の金沢などではこの遊びをオジャコトといっている。御座は年忌ねんきでなくとも僧しやうを請しょうじ、説教を聴ちやうもん聞ひとよする人寄せであるが、やはり法事のように食物が出たものと思われる。フルマイは

今では物を食わせることのごとく解せられるが、やはり定^{さだ}まつた吉凶行事のある日のことで、ただこれには必ず御馳走が伴っただけである。ままごとの地方名としては米^{よねざわ}沢でもオフルマエゴト、伊豆^{いず}の半島でもフルミヤツコ、遠く飛び離れて肥前の小値賀島^{おじかしま}まで、ホンミヤナンドという語が行なわれている。そうして多分もうその理由が忘れられているだろう。

おきやく遊び

上州の桐生^{きりゆう}附近ではオキヤクサンヤツコ、信州諏訪^{すわ}地方でオキヤクボツコ、またはオキヤナンコというのが東京などの御客遊びに該当する。九州でも熊本県の球磨^{くま}郡をはじめ、ままごとをキヤクナンドというところは多いようである。遊戯中心の移るにつれて、新しい名も次々に生まれている。大垣^{おおがき}の附近にはゴチソウサンゴト、信州でも上田^{うえだ}地方にはヨバレツコもしくはオンバレコ、これは新旧二つの方言のたがいに接近して紛れやすくなった

例である。一茶の『方言雜集』にオバチコとあるのが、多分北信の例であろう。子ども遊びに柿かきなど切り刻みて、呼んだり呼ばれたりすること也なりとあるが、これは呼ばれごとでなく、姥うばごとの方から出ているかと思う。

御客遊びをオクサンゴツケンと呼んでいる例が、大分市にはあるというが、越後えちごのどこかにもオカサマゴツチョという名ができていて、この方はかなり起りが古い。たとえば『甲斐かいの落葉おちば』にはオカダツコ、食物調理の真似をして遊ぶこと、すなわちままごととあるが、南大和みなみやまとの方言集にも、雛ひな遊びをここではオカタサンゴトというところがある。宮城県はほとんど全国を通じて、オカブツ・オカカボチといった記録がある。主婦をオカタというの

は中世以後の標準語であつて、それを小児があどけなく発音したのが、今日のカアサマ・カカサン・カカ・オツカーなどの語を作っている。彼らの功労は国語の先生よりも大きいかと思う。

ままごとの主役はおかっぱの主婦だったのである。だから主婦の名が変ればそれについてままごとの名も變つて行くのである。

母をオウカチャマという越後の新発田^{しばた}辺ではオガチャマゴト、主

婦がジャジャと呼ばれる秋田県の北部ではジャジャボツコという

のがままごとのことである。ジャジャは中世の茶々の局^{つぼね}などのチ

ヤチャと同じく、もとは緑^{みどりご}児が母を呼ぶ声から出たものらしい。

今では父をチャンと呼ぶ方が多くなっているが、越前の福井附近でままごをジャジャンコ、紀州の熊野でチャチャボコというの

も、かつては母をそう呼んでいた名残りかと思う。そういう例ならば外にも求められる。山形県のオバコは今日は未婚の女のことだが、米沢^{よねざわ}地方ではままごとをオバコダチ、中国地方のオバサンは他家の婦人のことなのに、但馬^{たじま}ではこの遊びをオバサンゴトと呼んでる。それはみな家々の主婦をウバといったころの遺物なのである。

ゴコトンボ

主婦をオカタという語が、上流に限られている時代には、常人の家ではそれをウバといったのである。その語もまだ残って東北ではアツパ、沖縄ではアンマがあるが、一般に呼名は許よびなされる限り上級へと登って行つて、裏長屋うらながやにも奥さんは多くなつたのである。これから考えて行くと信州松本附近のように、御客遊びをオバゴトといっているのは一時代古い頃の形ということが出来る。静岡県でも西の方によるとオンバゴトがある。村によつて発音は

少しずつ変りオンバイゴトなどという児もあるから、もう主婦の真似ということは忘れているかも知れぬ。

九州の端々でも上五島はしばし かみごとうでバツジヨ、薩摩さつまの下甕島しもこしきじまでは

バツコーというのが、ともにままごを意味している。それよりもさらにわかりにくいのは紀州東熊野ひがしくまのの尾鷲おわせあたりで、ナンコ

ビまたはゴコトンボというのが同じ遊びの名である。ナンコビの

方はまだ不明だが、他の一方は私には説明できる。ゴコというのは中国で、若い女性を意味するよい言葉であるが、そのゴコと姥うば

との対応を真似たことが、ゴコトンボの名の起りであつた。それ

によく似た例は伊豆七島の三宅島みやけじまの一部で、ままごをネザン

バまたはネタンバアということで、これは「ねえさん婆さん」の

意味だということを、島の人もまだ知っている。村によつてはオンバツコもしくはウンバージというところもあり、そのウンバージも姥爺うばじいだろうという。主人夫婦のことをオジンバとさはた（土佐幡多、近江伊香いかけ）、オンジヨウンボ（鹿児島県）、バオジいずも（出雲）、ウバグジ（陸前栗原）などといい、または熊手くまでと高砂たかさぎの絵から思いついて、ジヨウトンボという土地もあるのだから、ゴコトンボも決して不思議な名ではない。

ただし女の児の遊戯に出て来るゴコは、ただの年若い娘ではなく、花嫁御はなよめごのことであつたかと思う。常の日には見られぬような化粧をして、里で散さんざん々練習をして来たよい口こうじよう上で、新たな家の姥と対談している姿を、眼をまんまる円くして傍聴していた小

娘たちが、それを自分たちの遊戯の名とし、または中心としようとした気持は、神事しんじのわざおぎが近世のただの芝居になって来た経過と、何だか似よったものがあるような気がする。食物の調理を中心とした古い遊戯がしだいに眼で視み、耳で聴きく楽しみに移つて来たのは、必ずしも明治以来の新文化の影響だけではなかったと私は思っている。

鬼事言葉

人形がおままごとに参加したのは、遠い対馬つしまの阿連村あれの例はあ
 るが、一般にはずっと新しいことで、今ある姉様遊びあねさまあそに伴うて
 ひろまったものらしい。姉様遊びの姉さまが新嫁にいよめの別名であつ
 たことは、あの顔より大きな髪飾かみかざり、紅の衣裳いしやうの染模様そめもようを
 見てもわかるが、その花オカタが古いオカタと同居して、特に姉
 様と呼ばれて区別せられる必要などは、元もとは少なくとも村落には
 なかったのである。

この姉様人形が入って来たころから、ままごとはしだいに食べる遊びでなくなった。三宅島^{みやけじま}のネザンバなどはどうかしらぬが、子どもは人形を相手にして遊び出すと、急におしゃべりになるか、そうでないまでも言葉の楽しみを味わう力ができてくる。大人が傍^{かたわら}にいるうちは黙っているが、それでも独^{ひとりごと}言や心の中の言葉が数を増して、感情のようや^{こま}く濃やかになって行くのがよくわかる。やたらに切り刻んだものを食べさせまいとする、衛生おかあ様の心^{こころづか}遣いはなくとも、文化が進めばままごとは文芸化せざるをえなかったのである。私は実は人形の普及がこれを促した大きな力ではなかったかと思っているのだが、その説明をしだすとまた長たらしくなるから、今回は見合せておく。とにかくに日本

の子ども遊びは、全体に込み入ったものが多くなり、かつ文句が面白くまた繁しげくなつて、言葉の楽しみというものが親たちの近ごろの会話よりも大きかつたのである。

そういう中でも特によく発達しているのは鬼ごとであろう。これも名称が自ら語るごとく、最初は神社仏閣の鬼追おにおい行事に、少年を参加せしめたのが起りと思われるが、今日は野球の規則の一部を採用したアブト鬼というのまでが各地にはやっている。内田うちだ武志君たけしの『静岡県方言誌』の一冊が、丹念にこの種類を集めている。全国各地の児童界にも、親がこしらえて与えたとは思われぬ色々の鬼事術語が、土地ごとに制定せられている。

たとえば何かの理由で一人だけがタイムを要求する合図あいずの語に、

ミツキ・ミツコ・ニツキ・モンキ・マツチ・チヨマ・ゴイロ・ゴ
イ・ゴー・タンマ・タンコ・テンマ・タエマ・オヒマ・マヒ・ド
ツパ・ベン等、さては幼少な者を加えて特別扱いにすることをチ
ヤチベ・アブラボウズ・カワラケ・ナベコ・ヒデコ・ミズツコ・
スボノコ・ロツパ等々、一々土地を挙げその由来を考えようとし
たら、読者が困ってしまわれるだろうほど数多くできているの
である。

狐あそび

信州ちいさがた小 県 郡の民謡集に、鬼遊びのわらべことば童 詞が七章まで載つ
ている。

鬼の来るまで 洗濯でもしやしよ
鬼の来るまで 豆でも炒いりやしよ
がらくがらく 石いしうす臼がらく
豆はたきとんく

鬼を激^{げつこう}昂させる手段として、東京でも洗濯だけはいうが、こ
うなると、もう一つの演劇であつて、しかも作者は土地の子どもの
ほかにありえない。あるいは文句を他所^{よそ}から聞き覚えて、呪^{じゆも}
文^んのようにそれを守り、または若干の作意を加えたものが鬼き
めの言葉には多い。羽後^{うご}の大館^{おおだて}附近に行なわれていたのは、

隠れぼっちにかたなの者は

しんぎのこちやのれんげの花

これを新沢という村の麴^{こうじや}屋のここのように思っていたそうだ

が、実は非常に古くからあるちいこぼうし小法子法師、すなわち一寸法師の物語であつた。江戸でも早くから意味が分らなくなつて、チーチャコモチャ桂かつらの葉などとうたつていた。備前の岡山では、

つーちやこもちやかずらの葉

ねんねがもつたらちよと引け

すなわち東北は遠いだけに、まちがいが幾分か大きかったのである。

鬼きめというのは、小さなにぎこぶし握り拳を並べさせて、歌の文句に合せてその上を突いて行くのだが、その言葉にも遊戯の趣意を説こ

うとする、序曲のような役目があったのかも知れぬ。ことに隠れ鬼や目くら鬼では、遊びのなかばでは声を立てることができない故に、初めに歌っておく文句が多かった。

だあまれくきじ雉の子

鉄砲かたげがとおッぞ

うんともいいうな屁へもひんな

これは肥ひ後の球磨くま地方の、モウゾウ隠れ（隠れんぼ）の歌であった。是これよりも一段と劇的なのは今も田舎いなかに残っている狐きつね遊あそび、大阪でもと「大和やまとの源九郎はん」などといった鬼ごたである。

百年以前の『嬉遊笑覧きゆうしやうらん』にも、

鬼ごとの一種に、鬼になりたるを山のおこんと名づけて、引きつれて下に屈かがみ、ともくつばねな抜ぬこくと言ひつつ、茅花つばな抜くまねびをしてはてに鬼に向ひ、人さし指と大指とにて輪をつくり、その内より覗のぞき見て、是なにと問へばほうしの玉といふと、皆逃げ去るを鬼追ひかけて捕なふる也

と見えている。今日の「御山の御山のおこんさん」遊びの筋書すじがきは、もうまただいぶ長くなっていて、これに子どもでなくては言えぬようなおかしい問答が数多く繰り返される。

子買お問答

私などが子取ろといっていた遊びは讃岐^{さぬき}ではオトリコトリ、南伊予でウシノコトリというのも同じで、鬼事の一種であつた。強い大きな児^こを前に、順々に帯に手をかけて繋^{つな}がり、鬼がその後の児を捕^とろうとするのを、動きまわつて先登^{せんとう}が防ぐので、これは動作があまり激しいので、短い単調な言葉しかくり返されていなかった。ところが別に今一つ、

子買お子買お

子を買うてなんにする

赤のまんまに魚そえて食わそ

というような問答を、際限もなく遣り取りする遊びがあつて、それを大阪では子取りといったときくが、本当であろうか。

子買おの文句は国々で実によく発達している。奥州おうしゅうの端で

は子売ろというそうだから、元はもと「どの児がほしい」というのが

一般であつたと思われるのだが、近頃は遊びの名前までが變つてきている。たとえば熊本の附近では猫ねこもらい、越後えちごの岩船郡いわふねでも猫じゃ猫じゃというのがこの遊びで、

猫じゃ猫じゃ

どの猫ほしや

後の何々猫ほしいわ

という類^{たぐい}の問答をする。仙台の市中の子どもはこれを雀^{すずめ}とりとい
った。

どの雀よかろ

いつも来るよな誰それ雀よかろ

どの茶^{ちやわん}碗^{わん}でかせる^{くわ}（食^くせる）

金の茶碗でかせる

という風^{ふう}に、着物や家などを次々にたずね、それが一通り終ると、名^なざされた子どもが、自分でブーンといつて飛んで来る。すなわち子どもは問答の面白さに気を取られて鬼事はもう忘れているのである。しかし埼玉県で雛^{ひな}買^かいというのはこれに反して、婆^{ばあ}さんが川^{かわ}越^{ごえ}の市^{いち}へ雛人形^{ひなごころけい}を買いに行き、一つ一つを見立てて、くすぐって笑わぬのを買おうといったり、臼^{うす}を挽^ひかせたり、よくないといって返しにきたり、芝居同様の色々のしぐさがあるのだが、それでいて留守^{るす}にその雛が逃げ出し、それから鬼ごとなるのだといっている。察するに最初は、「向いのおばさんお茶のみにお

出で、鬼が怖こわくて行かれませんか」のように、または遠州の鰻屋いわしや問答で、鰻の値段をきいて「負からんと後の子うしろを取るぞ」というように、鬼の遊びを面白くする前幕であつたのが、末には児童がその文芸を愛するあまりに、これを独立した静かな遊戯の一つに、作り上げたのかと思われる。

国語と子ども

年をとった者に子ども話をさせると、どうしても懷旧味ばかりが多くなる。もう全体を説き尽くせないことがわかったから、てみじか手短かに私の要点とすることを述べよう。

いわゆる児童文化は孤立した別個の文化ではない。国にそのような離れ離れのもものが、並び存するわけがないとすると、単に一国一時代の文化相が児童を通して視みればまたちがつた印象を与え、こころもち心持をもつて皆さん

と自分は、この児童文化を少しばかり見なおした。児童は私が無く、また多感である故に、その能力の許す限りにおいて時代時代の文化を受け入れる。古く与えられたものでも印象の深さによって、これを千年・五百年の後に持ち伝えるとともに、いつでも新鮮なる感化には従順であつた。そうして常に幾分か親たちよりも遅く、無用になつたものを棄てることにしていたらしい。ことに国語のうるわしい句におい・艶つや・うるおいなどは、かつて我々の親たちの感じたものを、今もまだ彼らだけは感じているように思う。こういうところに歴史を学ぼうとする者の反省の種たねが潜ひそんでいる。どうしてこのように無心な者の言葉が、聴けば身に沁しむのかと、いうことを考えて見るのもよい。風のない晩秋の黄昏たそがれに町をあ

るいて、

大わた来いくまゝ食わしよ
まアまがいやなら餅^{もち}食わしよ

という歌を聴^きいて、涙がこぼれたことも私にはあつた。或いは白
髪^{おきな}の翁^{いろうり}が囲炉裏^{ひざ}の脇で、膝の子の小さい手をおさえながら、

ひいひいたもれ

火が無い無いと

この山越して

この田へおりて

などと歌ってきかせているのも、単なる昔なつかしの情を超えて、
我々を教訓しまた考えさせる。火もらいは燧ひうちいし石の普及よりも、
もう一つ以前の世相であつた。それが奥おうしゅう州の昔話や信濃しなのの山
村の子守歌だけには残っている。老人の記憶にはまた一つもとの
子どもがある。言葉が面白いために消えてしまうことができな
つたのである。かすみうら霞ヶ浦の湖岸の村にも、

ひいころ火ころ

火は無い無いぞ

おばたの下で云々^{うんぬん}

というような歌がある。東京では年少の者を罵^{のの}るのに、ヒイヒイ
タモレという語があつた。すなわち元^{もと}はこの土地にも同じ歌が、
幼い人々に口ずさまれていたのである。

鹿遊び

鹿・鹿・角・何本の遊びが、近江おうみと筑後の二カ所にあつたということを、物珍しそうに書いておいたところが、たちまち全国から百七十何通の手紙が来て、自分の土地にもあると告げられたのはびっくりした。この御礼の方法は別に考えなければならぬが、とにかく大要をここに載せて、読者におことわりをする義理が私にはある。

この遊戯が近ごろまで行なわれていたのはだいたい九州と四

国、ことに福岡と愛媛の二県は、各郡市残らずというほどに分布しているが、東の方も千葉県の東海岸、越後佐渡にまで及んでいた。報告のなかったのは奥羽六県と富山以西の日本海側の諸県および長野・岐阜の中部二県だけで、近畿・東海にもぼつぽつとあるが、やはり瀬戸内海のまわりが多い。百七十何通といつても、同じ土地から幾人もの知らせがあつたのだから、総数にして二十四の市と五十五の郡と、五つの島との計八十四カ所に、現在もお行なわれ、またつい近年まで確かに行なわれていたのである。報告者はいろいろの年齢の人で、いずれも十年・二十年の前に自分が携わっていた記憶を喚び起してなつかしいと言っておられる。若いおかあ様たちを讀者に予期していたのだが、こういう意外な

人までが見ておられたのである。なるほど新聞はよいものだなと、改めてまた経験したことであつた。

そんな話よりも、遊戯のどう変つて来たかということ、あらしだけでも述べておかねばならぬ。このごろの鹿遊びは、いつたいに男の児この荒々しい運動となり、女が参加することはできぬようになつてゐる。一人がうつむいて馬になることは外国のも同じだが、遠くから走つてきて木馬もくばのように飛び乗り、足が地についたり、乗りそこねたりするのを負けとしてゐる所さえある。それでいて例の鹿々何本を、まだ掛かけ声こゑのように唱となえているのだから、考えてみると子どもは面白い。伊予などでは胴乗りと称して、幾人もの子どもが帯をつかまえて繋つながり、長い馬になつて組を分

けて乗りつくらしをしているのもあるが、やはりまだ鹿何ちような
どと、数を当てさせる言葉を使っている。そうして他の多くの例
では、依然として当てられた児が次の馬になる遊びなのである。

遊戯の進化

九州・四国が最も新しい流行地である故に、変化も一段と烈し
いのではないかと思う。第一に角つのという語を落しているのが多い。
初めてシカシカが鹿だったということを知りました、と言つてき
た人も多おおぜい勢ある。或いはチカチカなんぼ・チケチケ何本・カチ
カチなんぼという処ところもある。京都はこの鹿々が犬にでもなつたも
のか、

ペスペスこれなんぼ

などといっている。この唱え言葉はもつと奇妙に変わっているのだが、それはもう一度後あとでいう。四国から東では、だいたい鹿の角という者が多いから、何本という問いの意味はまだ忘れてしまつてはおらぬらしいのである。

最初これがあてもの遊びの一つであることを知っていた間は、女の児この中でも行なわれていたものと思われる。九州北部でも稀まれにはシカシカ何本と唱えて背なかを叩たたき、指の数をいい当てさせることをしていたと、あるわかい女の人は報告している。それを男の遊びを半分だけ真似たように思っているのは多分誤りで、ま

だ他の地方ではお年玉の数、銀杏いちようや榧かやの実みの数を隠して、相手に当てさせるにも同じ言葉を唱え、または手を組み、輪になって、中央に一人の児をしゃがませ、目を押えて物の数を当てさせる場合にもなお口々にこの鹿々何本を唱えていたというから、馬乗りの方がむしろ一つの応用だったとも見られるのである。

土地によつては、何の申し合せもなしに、不意にかがんでいる児の後から乗りかかつて、指を高く掲げて鹿なんぼと問うという例もある。これは面白かった遊びのおさらえとも考えられぬことはないが、浜松地方などでは家の中でこの遊戯をすることがあり、それは唯ただうつむいている背なかの上で、鹿の角に何本あるかを問うだけで、女の子もこれに参加するというから、少なくとも以前

はもう少し静かな、同じ馬乗りとはいっても、ただこちらを見てはいないということを確認める目的で、相手を屈かがませていただけかも知れない。

二つの遊戯の結合する場合は多い。たとえば石蹴いしけりなどは私などの全く知らなかった遊びだが、東京というチンチンモガモガ、関西という足ケンケンの上じょうず手な児なら、誰でもこれに参加せずにはいない。ケンケンも元は蹴ることを意味していたのかも知れぬが、近ごろはただ片足で飛んで「ケンケンばたくなぜ泣くね」の歌を、うたいあるく遊びだったのである。

児童文芸

それからまた、この鹿遊びの外国から入って来たということ、全然無視していたのも悪かった。必ずそうだとは誰にもいえないが、そういうこともあり得るとまでは認めなければならぬ。越後^{えちご}高田^{たかだ}のある女学校で、明治初年に教育を受けた一女性がこの遊びを記憶していた。ここに來ていた米国人の教師で、格別に子どもの好きな人があつて、たくさんのおちらの遊戯を教へて行つた。これもその一つであつたようにこの婦人はいつている。これは確

かな事実であるにしても、今ある九州・四国の鹿々なんぼが、ここから運ばれていつて発達したということまではどうてい証明する道はないであろう。しかしこの程度の出来事なら、同時に他の土地にもあつたかも知れない。私の受取つた報告の中には五十年前にあつたというものが三つ、あるいは七十近いお婆さんが、私の生まれる前からあつたといった例も同じ越後にあつたが、それにしたところで明治以前でない。児童の遊びは他の慣習とちがつて、一年のうちには百度もくり返され、真似の上手な手あいが熱心に見つめていたのである。一旦流布する^{るふ}とすれば足取りは早かつたはずである。

注意すべきことには、鹿々角何本というように安らかな日常語

で問う例は割に少なく、前に掲げた浜松市をはじめ、神奈川・山梨・富山などの諸県には、

鹿よ鹿なんじよ汝の角は幾本なりや

という類の、近ごろの新文章くちよう口調で問うているものが多い。それが滋賀県にも、香川県にも、またシカシカなんぼの最も盛んな福岡県にもあるのは、あるいはまたこの言葉の珍しく、かつ大人おとなくさいのに興味をひかれたのが、はじめだったかもしれない。指の数を当てさせて、はずれたとき、ちがうという代りに正しい数を出し、
 いい、「三本何本」とたた畳みかけて問う風は九州にもあるが、大分

県の方には最初から、

レイボン、何本

という妙な問いかたがあつて、それを零本のことだと解しているらしい。滋賀県の犬^{いぬかみ}上郡でも、

レイボン、鹿の角何本

鹿の足何本

などという聞きかたがあるという話だが、このレイボンなどが、

或いはなんらかの手掛^{てが}りではあるまいか。私はなお他の地方の変
った事実^{じじつ}に、これからも気をつけていたいと思っている。

ネンガラ鈎

念木・念棒の問題についても、二十何通の通信を私は受取っている。遊びの方式はこの土地もほぼ一様で、ただ細かな規則に少しずつの差異がある。名称は隣どうしの村々でもちがっていて、しかも不思議に遠い地方との一致が認められる。あまり数が多いので私も全部は列記しなかったが、やはり一ばん多いのはネンで、その中でもネンガラ・ネンガリなどがひろく行なわれている。木とか棒とかクイとかいうものの、今一つ古い言葉がカラではなか

ったかと私は思う。

ネンガラには元もとはみな鉤かぎ枝えだがついていたろうというのが、私

の新しい意見であつて、これにはまだ同意の人が少ないように思われた。しかし自分が鉤のある念棒を用いていたというためなく、本来は二ふた又またに岐わかれた木の枝というものが、特別に靈の力があるもののように、我々の祖先には考えられていた。その心こころも

持もちが今も子どもの中に伝わっているごとく感じたからである。

二ふたまた大根だいこんなどは近頃の話だが、もとは「またぶり」という股また

になつた杖つえを、旅ひじりの聖などは皆ついていた。西洋で占うらいの杖とい

うのも皆これで、金鉞・地下水の発見の技術も、また北アジア名

物の宝たから搜さがしも、もとはすべてこの枝によつたのであつた。ネ

ンガラおとなの童戯が果して私の想像のように、最初子どもらしい大人の占いの方法に出たものならば、必ず鉤があるわけだと私は思っているのである。

ところが関西のネンガラにはもう一般に鉤がない。ないのが当り前のようにいう人が多いので、少しばかり弱っていると、これも幸いに実例が出てきたのである。九州でも中央の山地にはまだ鉤のあるネンがあるらしい。豊後の玖珠ぶんご地方のものは久留島武彦くるしまたけひこ氏が図示してくれられた。ただしここのは関東とちがって、

小枝の方を長くして把手とってにしている。それでは力の入れかたが我々とは異なっていたらうと思うが、とにかく呼吸だから、覚え込んだものが伝わっているのである。或いは鉄で打たせたものもある。

って、これも棒ではなく、よほど曲っているのが面白いと思った。山口県の一部では、キリコまたはネコというのが、鉤のある念木の特別品であつた。佐賀県および豊前ぶぜんの一つの報告では、ネン木は通例は直すぐな棒だが、時には枝附きのものを大事にして持つておる子がある。この方が勝負に強く、相手に打たれてもくるつとまわつて容易に倒れぬからということであつた。

鹿遊びの分布

朝日新聞の「こども風土記」の中に鹿・鹿・角・何本の遊戯のことを書いておいたら僅わずか七、八日の間に、驚くべし百七十余通の手紙葉書はがきが到着し、それがいずれも近年までこの遊びをしていたという、関係者自身からの知らせであつた。この方面においては民間伝承の会はまだ無識むしきであり、かつ怠慢であつたことが明らかになつたから、罪滅つみほろぼしのためにその資料を整理して、同志諸君に報じ、またこの問題を起してくれたアメリカの学者に通信

し、同時に各地の書状の主^{ぬし}に感謝の意を表したいと思う。一々その氏名を掲げるのが本意だが、あまり数多いのでそれができない。ただ次の二十四市・五十五郡と五つの島、合せて八十四カ所以上の土地に、ほんのわずかずつの変化をもつてこの鹿遊びが行なわれていたということを、お互いに知ってもらい、かつそれを比較し綜合してみると、こういうことが考えられるというまでの報告をもつて、私の答礼に代^かえたいのである。

まず最初に現に鹿々の遊戯が行なわれ、または近い頃まで行なわれていたことの、確かなところは次の通りである。地名の下^この数字は受取った書状の数で、二、三人以外はみな成人だから、是^{これ}だけの諸君が独立に記憶しており、また思い出してくれられたの

である。

同	同	同	同	同	同	同	同	福岡県
糟屋郡	かすや 福岡市	あさくら 朝倉郡	うきは 浮羽郡	おおむた 大牟田市	みいけ 三池郡	やめ 八女郡	みい 三井郡	くるめ 久留米市
2	4	3		4				5

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

京都郡みやこ 企救郡きく 門司市もじ 戸畑市とばた 若松市わかまつ 八幡市やはた 遠賀郡おんが 宗像郡むなかた 嘉穂郡かほ 直方市のうがた 鞍手郡くらて

6

3

11

10

2

6

5

同 田川郡 4

同 糸島郡
いとしま

佐賀県三養基郡
みやき

長崎県北松浦郡
きたまつうら

同 佐世保市
させぼ

同 壱岐芦辺浦
いきあしべうら

熊本県菊池郡
きくち

同 八代郡
やつしろ

大分県下毛郡
しもげ

同 中津市 2
なかつ

同 宇佐郡
うさ

同 おんせん
温泉郡 7

同 おち
越智郡

同 おおみしま
大三島

同 いまばり
今治市 6

同 しゅうそう
周桑郡

同 新居郡

同 うま
宇摩郡 2

香川県 みとよ
三豊郡

同 伊吹島

同 なかたど
仲多度郡

山口県 うべ
宇部市 4

同 吉敷郡 よしき

広島県広島市 2

同 倉橋島 くらはしじま

同 豊田郡 とよた 2

岡山県浅口郡 あさぐち

兵庫県赤穂郡 あこう

同 加西郡 かさい

大阪府北河内郡 きたかわち

和歌山県日高郡 ひだか

京都府京都市 2

三重県阿山郡 あやま

滋賀県しが滋賀郡

同 おおつ 大津市

同 いぬかみ 犬上郡

同 ひこね 彦根市

同 たかしま 高島郡

愛知県 へきかい 碧海郡

静岡県 はままつ 浜松市

同 ぬまづ 沼津市

同 たがた 田方郡

山梨県 きたこま 北巨摩郡

神奈川県 あしがらしも 足柄下郡

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
なか	なか	なか	なか	なか	なか	なか	なか	なか	なか
中郡	中郡	中郡	中郡	中郡	中郡	中郡	中郡	中郡	中郡
こうざ	こうざ	こうざ	こうざ	こうざ	こうざ	こうざ	こうざ	こうざ	こうざ
高座郡	高座郡	高座郡	高座郡	高座郡	高座郡	高座郡	高座郡	高座郡	高座郡
いすみ	いすみ	いすみ	いすみ	いすみ	いすみ	いすみ	いすみ	いすみ	いすみ
夷隅郡	夷隅郡	夷隅郡	夷隅郡	夷隅郡	夷隅郡	夷隅郡	夷隅郡	夷隅郡	夷隅郡
あがつま	あがつま	あがつま	あがつま	あがつま	あがつま	あがつま	あがつま	あがつま	あがつま
群馬県	群馬県	群馬県	群馬県	群馬県	群馬県	群馬県	群馬県	群馬県	群馬県
吾妻郡	吾妻郡	吾妻郡	吾妻郡	吾妻郡	吾妻郡	吾妻郡	吾妻郡	吾妻郡	吾妻郡
たかだ	たかだ	たかだ	たかだ	たかだ	たかだ	たかだ	たかだ	たかだ	たかだ
新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県	新潟県
高田市	高田市	高田市	高田市	高田市	高田市	高田市	高田市	高田市	高田市
みなみかんばら	みなみかんばら	みなみかんばら	みなみかんばら	みなみかんばら	みなみかんばら	みなみかんばら	みなみかんばら	みなみかんばら	みなみかんばら
南蒲原郡	南蒲原郡	南蒲原郡	南蒲原郡	南蒲原郡	南蒲原郡	南蒲原郡	南蒲原郡	南蒲原郡	南蒲原郡
なかかんばら	なかかんばら	なかかんばら	なかかんばら	なかかんばら	なかかんばら	なかかんばら	なかかんばら	なかかんばら	なかかんばら
中蒲原郡	中蒲原郡	中蒲原郡	中蒲原郡	中蒲原郡	中蒲原郡	中蒲原郡	中蒲原郡	中蒲原郡	中蒲原郡
さどあいかわ	さどあいかわ	さどあいかわ	さどあいかわ	さどあいかわ	さどあいかわ	さどあいかわ	さどあいかわ	さどあいかわ	さどあいかわ
佐渡相川	佐渡相川	佐渡相川	佐渡相川	佐渡相川	佐渡相川	佐渡相川	佐渡相川	佐渡相川	佐渡相川
しもにいかわ	しもにいかわ	しもにいかわ	しもにいかわ	しもにいかわ	しもにいかわ	しもにいかわ	しもにいかわ	しもにいかわ	しもにいかわ
富山県	富山県	富山県	富山県	富山県	富山県	富山県	富山県	富山県	富山県
下新川郡	下新川郡	下新川郡	下新川郡	下新川郡	下新川郡	下新川郡	下新川郡	下新川郡	下新川郡

この表で明らかかなように、だいたいにこの遊びの分布は西の方、

ことに九州と四国との北半分に片よつており、福岡、愛媛の二県などは、ほとんど全般といつてよいくらいだが、それと繋がらな
 い他の府県にも飛び飛びに弘く行渡つてゐるうえに、方法と言
 葉の異同が入組んでゐるのは、何か一つの古い起りがあつて、近
 年の流行ではないように思わせる。しかしその伝播の実状なり、
 また子どもの新しい遊戯を迎える態度なり、習癖なりは、今日ま
 だ決して明らかになつてゐるわけでもない。むしろこういう顕
 著なる実例に基づいて、改めて是から研究せられてよい問題で
 ある故に、汎く児童文化の考察者のために、我々はこの記録を残
 して置きたいのである。

遊びの方法はだいたいに馬乗式で、背なかを敲くといふのは

至つて少ない。荒い挙動である故か男の児こが主であつて、女もしていたという例は二つだけである。単純な組合せは三人で一人が行司ぎようじ、数を当てられた児が次の馬になることは普通で、ただ問答の文句と節ふしとが、土地ごとに少しずつちがつている。指は上に向けて高く掲げる者が多く、片手は馬を押えていて五本以下の数しか問わない。両手で十までの変化を争うという例も稀まれにはあるが、こうなると馬の不利益ははなはだしい。そうでなくとも多くの児童が代る代る、どしんと乗りかかるのは相応にやりきれなかつたと言っている人がある。或いは握り拳にぎこぶしをさし上げてモゲタまたはモゲタリという処ところも九州に二つ三つあるが、是は多分土地だけの改作であらう。もっと大きな変化は伊予の各地において、幾

人かの子どもが前の子の帯を捉とらえて、連鎖式ともいうべき長い馬になり、それへめいめいが走って行つて飛乗とびのるもので、是は胴乗どうのりと呼ぶ村もあつて、馬飛びの運動との結合かとも思われる。鹿々何本の文句は口にしながらも、指の数は当てさせずに、落ちたり足が地に附いたりするのを負けとしているものがある。

九州のどこからしい或る一地では、鹿とは言わずにただ馬乗りになつて、

トントントンこれなんぼ

と問うている例がある。或いはもとその文句に合せて、背なかを

叩^{たた}いていたなごりではないかと思う。或いは男生徒のこの遊びをするのが羨^{うらや}ましくて、自分たちでも互いに背を打って鹿々なんぼを唱^{とな}え、指を出して当てさせる戯^{たわむ}れをしていたと知らせてくれた女性が三人ある。問いの言葉に格別の興味をもち、節をつけて唱えているのが一般であるのを見ると、これはこの方を主としていたのが、後^{のち}おいおいに相手を馬にして飛び乗る挙動の方へ移って来たのではないかとも思う。佐賀県の例では始めからの申し合せもなく、不意に後から乗りかかって指の数を問う戯れもあるという。これなどはいよいよ背なかを叩く方が元^{もと}の形ではなかったかを考えさせる。

次には指の数を問う文句であるが、これにはことに面白い変化

がある。全体に鹿・鹿・角・何本とくぎつて、はつきりと言う者が少なく、九州などは、

しかく何本

またはシカナンボというのが普通で、それが鹿だということを今始めて気づいたという人も多かった。鹿の角を明らかに言っているのは、九州では博多と京都郡とただ二カ所だけで、その他はシタシタ何本と謂^いったり、またはチカチカ何本という者が方々にある。広島市などでは、

チケチケワンボ

とさえ謂っている。紀州の日高郡でもチカチカこれ何本、京都ではまた、

ペスペスこれ何本

つまり鹿の遊びだということはもう忘れているのである。

愛媛県の方に来ると、鹿の角何本というのがまだ ところどころ 処々に残

っているが、一方には色々の言いかえが始まり、それも九州ほどには統一していない。最も簡単な、しかしかなんぼ以外に、たと

えば、

しかいちなんぼ（喜多）

しかんちよなんぼん（松山市等）

しかしかなんちよう（温泉）

しかやんなんぼ（越智）

しかく／＼しかの年なんぼ

その他の珍しい変化が現われている。是は運動の間拍子とも考え合せて見るべきものであろうが、とにかく意味もわからぬ語が永く伝わるには、別にそれぞれの理由が隠れて存するものと見

てよい。注意すべき点はなお幾つかあるが、九州でも大分郡と別府の町とだけに、

レイボン何本

と言つてきく例がある。是は下の児の答えが当らなかつた場合に、それを打消して「三本！^{うちけ} 何本」と畳みかけて問う言葉ともみられるが、一本も出さずに握り拳で出すことを、^{たた}零本^{れいぼん}というのは^{できす}少し出来過ぎてゐる。ところが遠く離れて滋賀県の犬上郡でも、同じ遊びは背の上から指を立てて、

レイボン、鹿の角何本、鹿の足何本

というのがあつて、土地の人は零本と解しているようだが、是などは問いの始めだからことに妙に聞える。何か原因のまだ捉えられぬものが有るのではないか。小さなことのようにだが手掛りはこんなところに潜^{ひそ}んでいると思う。

それからもう一つ、是は同じ滋賀県の大津などできく問答の言葉に、

鹿のつゝ何本あるや

三本あるわ

よう当てた

というのがある。「あるや」は児童の平語でないだけに、自然には生まれなかったもののように思われる。大津から京都へ越える山中の村でも、

鹿よ鹿よ角何本

九州方面でも朝倉郡に、

鹿々何本なりや

福岡市では、

鹿の角何本なるか

豊前の京都郡には、

鹿の角々何本なりや

三本なアリ

などという問答があるというが、是が飛び飛びに広い地域に及ん

でいる。少し煩^{わづら}わしいけれども列挙してみると、たとえば香川県の三豊郡では、

鹿よ鹿よ立てたる角は何本か

同じく多^た度^ど津^つでは、

鹿よ鹿よ汝^{なんじ}の角は何本あるか

東海道の方に来てても浜松市は、

鹿々何本の角ありや

相模^{さがみ}の海岸では、

鹿々汝の角は何本よ

と問い、甲州の北巨摩郡では、

鹿よ鹿よ鹿の角は幾本なりや

富山県の入^{にゅうぜん}善地方においても、

鹿よ鹿よ汝の角は何本なりや

と謂^いっている。こうした一致に至つては偶然ではありえない。或いは最初外国にあつたものを直^{ちよくやく}訳に移したかという想像も成り立つのである。

外部に独立した証拠のないかぎり、そう断定してしまうことはもちろんできない。我々の一つの仕事は明治以前の文献の中に、これを記したものが全く無いということを確認することであるが、それは容易ではないだけでなく、記録に無いということは実はまだ当てにはならない。平凡なる日常の生活は、筆に表わされずに

幾らでも伝わっているの、他の多くの児童遊戯とても、必ずしも何かに出ているとはきまらぬからである。しかしこの場合に考えて見るべきことは、我々の慣行には年に一度または人^{ひと}一代にただの一ぺんというような、くり返しの間^ま遠^{とお}なものが多いのに比べて、子どもの遊びは毎日の事件であり、これに参加する者は無数であるうえに、模倣^{もほう}と発明との境^{さかい}目^めも立たぬほど、印象に忠実な人たちであつた。機会さえあれば学び移し、遠くへ運んで行く^{あしど}足取りは速^{すみ}かだつたろうと思う。ただこういう海川山坂をもつて区画せられている国土において、いかにしてその機会が得られたろうかが、今はまだ具体的に答えられぬだけである。鹿々の遊戯などは、幸いにして互いによく似ていて、とうてい中心なしに別

々に始まったものとは思えない。だから各地の実例を引合せて、やがてその運搬の路筋みちすじがわかつてくるかも知れぬのである。

次にはこの遊びが古くからあったらしいということ、これも滋賀県と九州の一角とは、飛離とびはなれて二つだけあると思っていた間は、私などもそう推定せずにはおられなかったのだが、こうして中間の飛石がほぼ繋つながっている以上は、確かとは言えないまでもまた別な考えも成り立ちうるのである。同じ一つの土地からの報告を比くらべてみても、四十歳の人は三十年ほど以前、三十歳の人は二十年ばかり前の、記憶に拠よっているのが多く、もうこの節はやっておらぬようだというのも事実である場合もあるが、一方には近頃まで、または小学生などが今でもしていると、知らせて来

た者も有るのである。それと同様に古い時代からというのにも限度がある。二、三の老人の手紙によると、五十年前にもあったということは事実らしい。越後^{えちご}からは七十のお婆^{ばあ}さんが私の生まれる前からだと言ったという話も伝わっているが、それにしたところで、明治より古くはない。その以前は今はまだ明らかになつておらぬのである。同じ越後からはまた次のような報告もあつた。

明治の初年、高田の女学校で教育を受けた老女が、この遊戯を知っている。この学校には米国の宣教師に特に子どもが好きで、本国の色々な遊戯を教えて遊ばせていた人がある。この人去つてのち一つずつ無くなつてしまつたというが、鹿々もその一つのように思うとのことである。ただし文句の翻^{ほん}訳^{やく}口調^{くちよう}になつてゐる

のは、
越^{えつちゆう}中^{しゅ}の下新川^{しもにいかわ}のが最も近いだけで、
越後では、

鹿々々の角何本だ

または、

しかしかこの角なんぼだ

佐渡の相川では、

しかしか指何本

というのが行なわれている。従つて直訳くさいから米国からの輸入だとも言えないとともに、高田がただ一つの出発点だとも無論むろん認められない。ただ近世外国人から学び取ったということが、まるつきり有りうべからざる空想であるように私の考えていたのは行き過ぎだっただけである。

ただし女の子の学校において、米国宣教師が教えた遊びにしては、飛び乗りは少しばかり荒々しいように思われるが、是は唱となえごとの文句も同様にだんだんと變つて来たものとも見られぬことはない。現在この遊戲の最も盛んな西南の二県などは、むしろ新しい流行地であるがために、今のようになちがった形になっている

のかも知れない。もつと他の地方の遊びかたを、詳しく尋ねてみなければならぬが、遠州浜松などでは家の中で、女の子も加わつてする遊びであつた。単にうつ伏しぶになつてゐる背の上で指を立てて数を問うだけで、馬乗り・胴乗りというようなことまではしていなかつた土地がまだ有るのかも知れない。前に言い落したが福岡県の田川郡でも、女の子は御手玉おてだまを隠して数を当てさせるのに、やはり鹿々何本を唱えていた。またあいにくと地名を挙げてないが、是も北九州のいずれかの郡で、銀杏いちよう・榎かやの実などの数をあてる女の子の遊びにこの語を用い、なかには「中なかの中なかの小坊こぼ主うず」と同じく、手を繋つないで輪になつて中央うずくまに踞こつた児に、鹿々何本と謂いつてその樹実きのみの数をあてさせたという例さえある。是を男

の子の遊びの真似のように思っている婦人もあるらしいが、それにしては双方の動作があまりにちがいが過ぎる。察するにあの活かっぱ澁な飛乗りの運動に合が体たいしたのが後の進化であって、最初はまず唱えごとの耳新しさが、小さな人たちの興味を誘うたので、それがまた奇抜きばつな文章言葉の、遠くまで伝わって行つた理由でもあろう。これを外国輸入の証拠と認めるのはまだ早いとしても、少なくともこの言葉のできた時代が、明治以後だということは疑われない。そうして子ども遊びの興味の中心が動きやすく、一旦その中心をはずれると存ぞんが外容易に、そこだけは改まって行くとということと、女の子は比較的古い形を守るものだということが、是だけの材料からでも言いうるかと思う。

青空文庫情報

底本：「いども風土記・母の手毬歌」岩波文庫、岩波書店

1976（昭和51）年12月16日第1刷発行

2009（平成21）年7月9日第12刷発行

底本の親本：「定本柳田國男集 第二十一卷」筑摩書房

1962（昭和37）年12月25日刊

初出：「朝日新聞」

1941（昭和16）年4月1日～5月16日

鹿遊びの分布「民間伝承六卷九号」

1941（昭和16）年6月号

入力：Nana ohbe

校正：川山隆

2012年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

こども風土記

柳田国男

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>